

アカゲザル防除に関する各種データ

目次

1. 生息状況調査の取組み状況.....	1
(1) モニタリング調査の実施状況.....	1
① 群れの追跡調査・GPS テレメトリー調査.....	1
② 地元住民からの情報収集・活用.....	2
③ 群れの根絶確認(手法検討).....	3
(2) 房総半島南部のアカゲザルの生息状況.....	3
① 分布	5
② 集中利用域	7
③ 推定生息頭数.....	9
(3) 考察	11
① 第2次計画の成果.....	11
② 今後の課題	11
2. 捕獲の取組み状況.....	13
(1) 捕獲方法	13
(2) 捕獲データ及び分析結果.....	17
① 累積捕獲数	17
② 1箇所あたりの捕獲頭数.....	17
③ 檻設置年数ごとの平均捕獲頭数.....	18
④ 設置年数ごとの捕獲頭数.....	19
⑤ 月別の捕獲数.....	19
⑥ 群れごとの捕獲数.....	21
⑦ 檻別捕獲数	22
⑧ 捕獲個体の性・齢区分割合.....	22
⑨ 捕獲個体の子連れ率.....	23
(3) (補足) 有害鳥獣捕獲によるアカゲザル等捕獲数.....	24
(4) 考察	25
① 第2次計画の成果.....	25
② 今後の課題	25
3. 群れ毎の情報	26
(1) 北側地域	19
(2) 西側地域	27

（3）中央地域	33
（4）東側地域	41
参考資料	50

1. 生息状況調査の取組み状況

(1) モニタリング調査の実施状況

アカゲザル及びアカゲザルとニホンザルとの交雑個体（以下、「アカゲザル等」という）の生息状況や被害発生状況を把握するため、以下①～④の調査・モニタリングを実施した。

なお、取りまとめにおいては、便宜上、対象範囲を4地域（東側地域、中央地域、西側地域、北側地域）に区分して整理した(図1)。



図1 アカゲザル等生息域の地域区分

① 群れの追跡調査・GPS テレメトリー調査

捕獲個体にGPS発信器を装着し、ラジオ・テレメトリー法による追跡調査を実施した。令和6（2024）年度時点の追跡対象は、北側地域7群、西側地域5群、中央地域5群、東側地域4群の計21群（表1）であった。これら計21群から得られた情報について、行動域や移動パターン、分裂・合流の有無、季節的变化を把握し、群れ動向の把握や、大型捕獲檻の設置位置選定など、捕獲作業に活用した。

表 1 追跡対象群れおよび発信器装着個体の一覧（令和 6 年度末時点）

地域	群れ名	個体名	年齢クラス	性別	発信器の種類	初回捕獲年月日	発信機装着年月日	想定寿命	備考
北側地域	ウルシ群	ウルシ	A	♀	VHF	2016/7/23	2021/2/3	2023/8/4	
		カシューナッツ	A	♀	GLT-02	2019/2/4	2021/8/4	2023/2/4	
	アスナロ群	アスナロ	A	♀	VHF	2020/6/23	2020/6/23	2022/12/22	
		ツリバナ	A	♀	GLT-02	2020/6/23	2022/1/27	2023/7/30	
	ツツジ群	ツツジ	A	♀	VHF	2021/1/8	2021/1/8	2023/7/9	
		シソ	A	♀	GLT-02	2022/6/27	20205/12/27	2023/12/28	2024/12再装着
	ナギ群	コスモス	A	♀	GLT-02	2020/2/19	2020/2/19	2021/8/21	測位停止
	モミノキ含む群れ	モミノキ	A	♀	GLT-02	2024/1/16	2024/1/16	2025/7/18	首輪脱落※
アオダモ群	カンナ含む群れ	カンナ	A	♀	GLT-02	2024/8/11	2024/8/11	2029/3/5	2025年/1から不具合により測位停止
	ボトス	A	♀	VHF	2022/3/21	2024/1/17	2026/7/17		
	サザンカ	A	♀	GLT-02	2024/1/17	2024/1/17	2026/7/17		
西側地域	ミヤコ・クワ群	ナツミカン	A	♀	VHF	2008/7/24	2021/2/18	2023/8/19	
		ツクサ	A	♀	GLT-02	2009/3/7	2021/2/18	2022/8/21	測位停止
	エダマメ・ナシ群	エダマメ	A	♀	GLT-02	2011/7/31	2023/2/7	2024/8/9	
		ヤマユリ	A	♀	VHF	2013/8/6	2021/2/24	2023/8/25	
	ヒメオウギ群	サンド	A	♀	GLT-02	2024/2/19	2024/2/19	2028/9/12	
		オレガノ	A	♀	VHF	2022/1/12	2024/1/28	2026/7/28	
	カズノコ	A	♀	GLT-02	2024/1/28	2024/1/28	2028/8/21		
	タキミ群	シシラン	A	♀	GLT-02	2025/3/1	2025/3/1	2029/9/23	シントウまたはラッカセイの可能性あり
スズシロ・キノコ群	ジャノヒゲ	A	♀	GLT-02	2012/7/23	2024/1/18	2026/7/18		
中央地域	スゲ群 (旧オタキ・ススキ群)	マテバシイ	A	♀	GLT-02	2010/1/28	2021/1/7	2022/7/10	測位停止
		レモン	A	♀	GLT-02	2022/7/21	2022/7/21	2024/1/21	測位停止
		レンゲ	A	♀	GLT-02	2020/12/22	2020/12/22	2023/6/22	安楽殺処分※
		ナバナ	A	♀	VHF	2012/2/23	2022/1/13	2024/7/13	安楽殺処分
		ミソハギ	A	♀	GLT-02	2025/1/27	2025/1/27	2029/8/21	首輪脱落※
	オタキ群	エンジュ	A	♀	VHF	2021/7/2	2021/7/2	2023/12/31	
		コゴミ	A	♀	GLT-02	2022/1/13	2022/1/13	2023/7/16	測位停止
	ポピー・キンセンカ群	ダリア	A	♀	VHF	2022/1/27	2024/3/9	2026/9/7	
		ヒナ	A	♀	GLT-02	2024/3/3	2024/3/3	2028/9/25	
	スダジイ群	フジ	A	♀	VHF	2022/2/12	2022/2/12	2024/8/12	安楽殺処分※
		アオモジ	A	♀	GLT-02	2022/7/9	2022/7/9	2024/1/9	
		ピーマン	A	♀	GLT-02	2025/1/31	2025/2/4	2029/8/29	
ボブラ群 (旧スダジイ群)		ボブラ	A	♀	GLT-02	2020/12/22	2020/12/22	2022/6/24	測位停止
東側地域	アジサイ群	アジサイ	A	♀	VHF	2010/6/25	2021/2/11	2023/8/12	
		ティカ	A	♀	GLT-02	2009/6/9	2021/2/11	2022/8/14	測位停止
	ヨモギ群	マサキ	A	♀	GLT-02	2019/1/18	2022/7/21	2024/1/21	
	センリョウ群	サカキ	A	♀	GLT-02	2013/3/14	2021/6/18	2022/12/19	測位停止
ツルウメ群	ツルウメ	A	♀	GLT-02	2009/3/19	2022/1/8	2023/7/11		

※灰色：年度途中に発信器の運用が終了したことを示す。

② 地元住民からの情報収集・活用

地元市の協力を得て、住民から寄せられるアカゲザル等の目撃情報を収集し、捕獲作業の参考とした。

個体数調査

アカゲザル等の生息数把握を目的とし、群れの頭数、性・年齢クラス構成を明らかにするため、目視および自動撮影カメラによる個体数カウント調査を実施した。それぞれの概要は以下の通り。

目視によるカウント調査

性・年齢を直接観察またはビデオカメラの映像判定により特定し、群れ全体の構成を把握した。アカゲザル等の性・年齢クラスは性成熟過程を基に以下のように区分した。

- ・オトナ (A) : 6 歳以上
- ・ワカモノ (Y) : 4～5 歳
- ・コドモ (J) : 1～3 歳
- ・アカンボウ (B) : 0 歳

自動撮影カメラによるカウント調査(手法検討)

特定の群れの移動経路上に自動撮影カメラ（有限会社麻里府商事製 Lt1-6210 PLUS）を設置し(写真1)、撮影された映像を解析して個体数を推定した。

③ 群れの根絶確認(手法検討)

アカゲザル等の集中防除区域における根絶の最終段階を見据えて、根絶確認の手法の確立を目的とし、自動撮影カメラを用いて試行をおこなった(写真2)。本調査は、国内のタイワンザル根絶事例（青森県下北半島、和歌山県など）を参考とした。



写真1
撮影された GPS 発信器装着個体
(ヒメオウギ群)



写真2
撮影されたアカゲザルの群れ(61 頭)

(2) 房総半島南部のアカゲザルの生息状況

第1次計画以降に識別された群れとその変遷を整理した結果、令和6(2024)年度末時点で23群(不明群・調査中を除く)が確認され、令和4年度(2022)以降過去最多の群れ数であった(図2)。集中防除区域内における生息情報(群れ数)の把握が過渡期であった初期のころに比べ、近年では、依然として不明群の存在はあるものの、おおよそその群れ数は特定されている。分裂や合流についても頻繁に確認されており、全体の群れ数は増加傾向にある。

① 分布

第1次計画当初（平成19(2007)年度）は、南房総市白浜町周辺で4群が確認されていた（図3）。その後、新たな群れの出現や既存の群れの分裂により、令和元(2019)年度末には館山市・南房総市で19群（図4）、さらに令和6(2024)年度末には23群に増加し、防除実施ラインを超える行動域を持つ群れも確認されている（図5）。

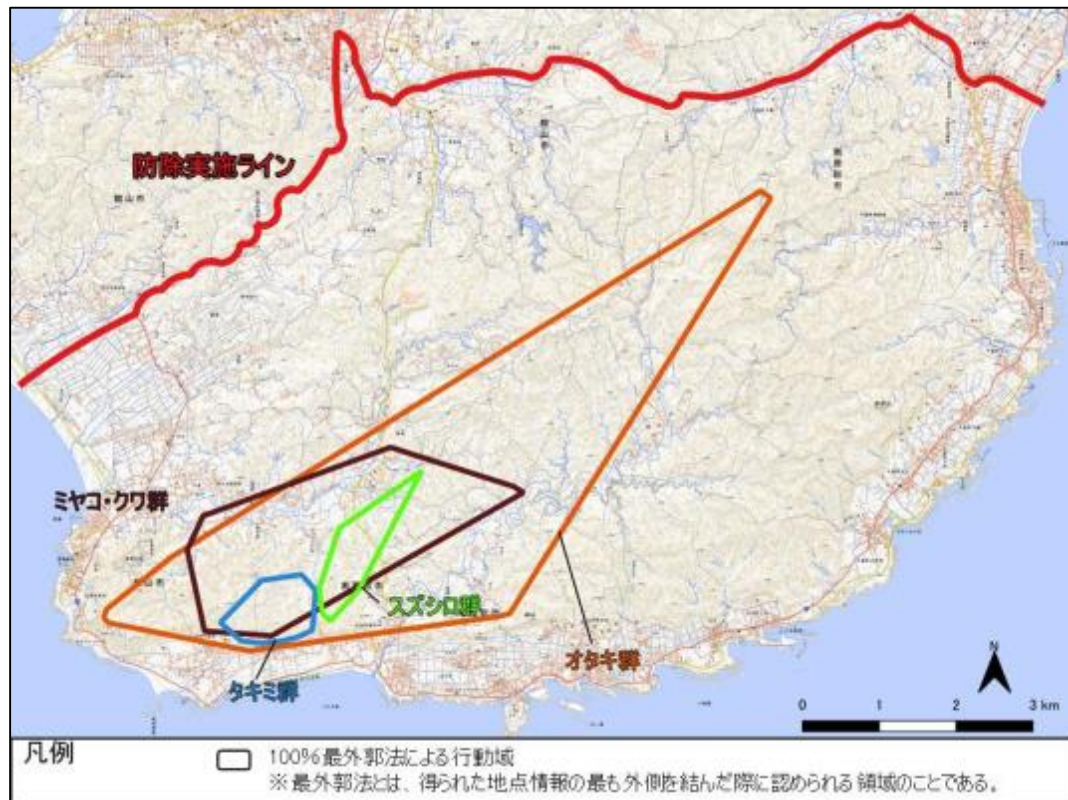


図3 平成19（2007）年度の集中防除区域内のサルの群れの行動域



図4 令和元年度（2019 年度）の集中防除区域内のサルの群れの行動域



図5 令和6 年度（2024 年度）の集中防除区域内のサルの群れの行動域

② 集中利用域

アカゲザル等の位置情報が集中する場所を濃く、そうでない場所を薄く図示し、アカゲザル等が頻繁に利用する場所（集中利用場所）を年度別に可視化した（図6～9）。

令和3（2021）～6（2024）年度の4年間のいずれにおいても、アカゲザル等は西部～中部の南側を中心に利用していたが、東部については、山間地であることからアカゲザル等の生息情報を十分に把握できていない可能性もある点に留意が必要である。

表1 ヒートマップ作成に用いた位置情報ポイント数（令和3～令和6年度）

年度	R3(2021)	R4(2022)	R5(2023)	R6(2024)
位置情報数	9,058	11,158	12,462	14,175

※位置情報は、ラジオ・テレメトリー法およびGPS発信器による測位点、ならびに目視や鳴き声の確認地点を含む

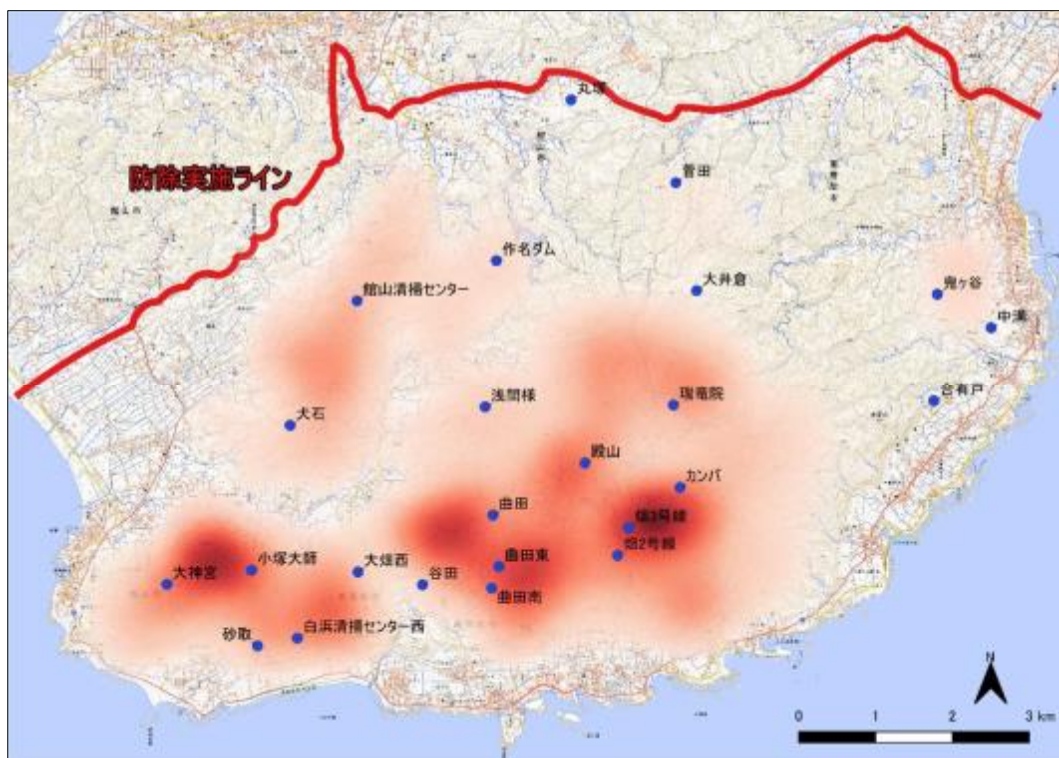


図6 令和3年度（2021年度）集中防除区域内の重点利用場所

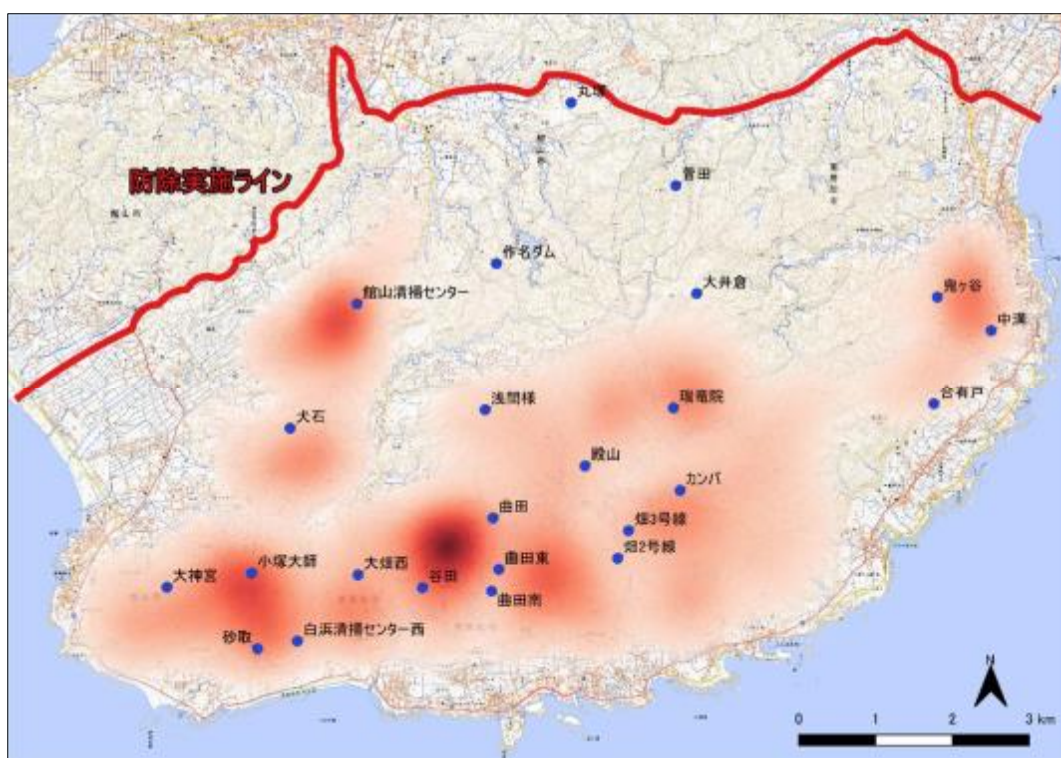


図 7 令和 4 年度（2022 年度）集中防除区域内の重点利用場所

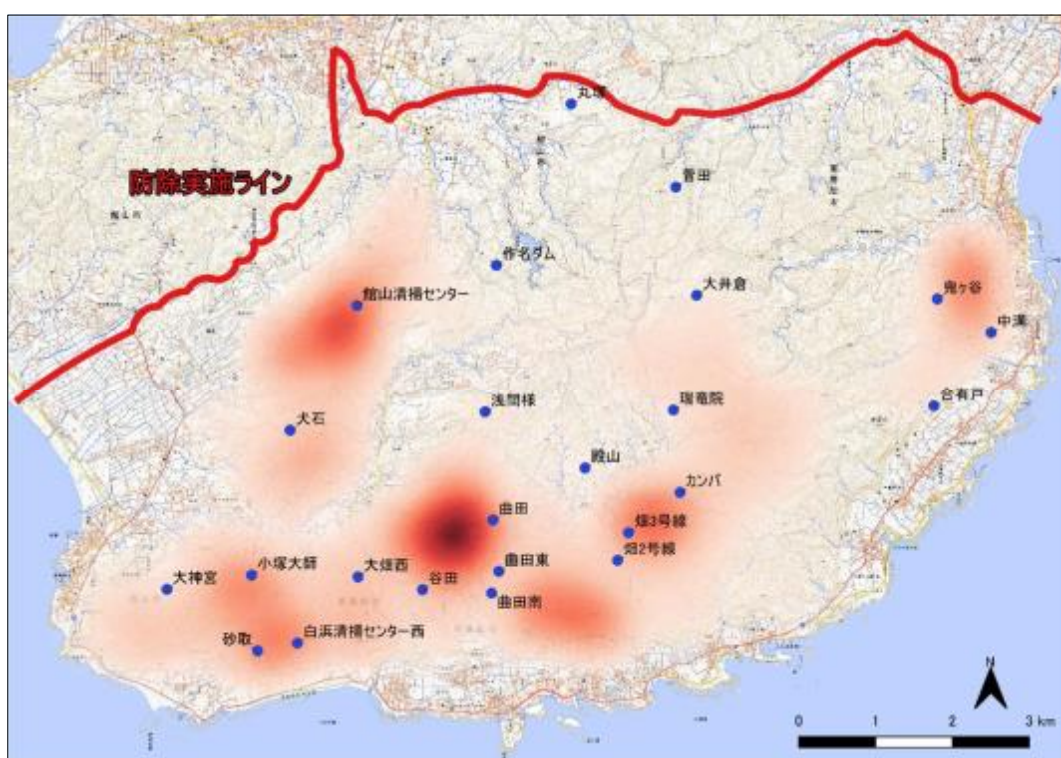


図 8 令和 5 年度（2023 年度）集中防除区域内の重点利用場所

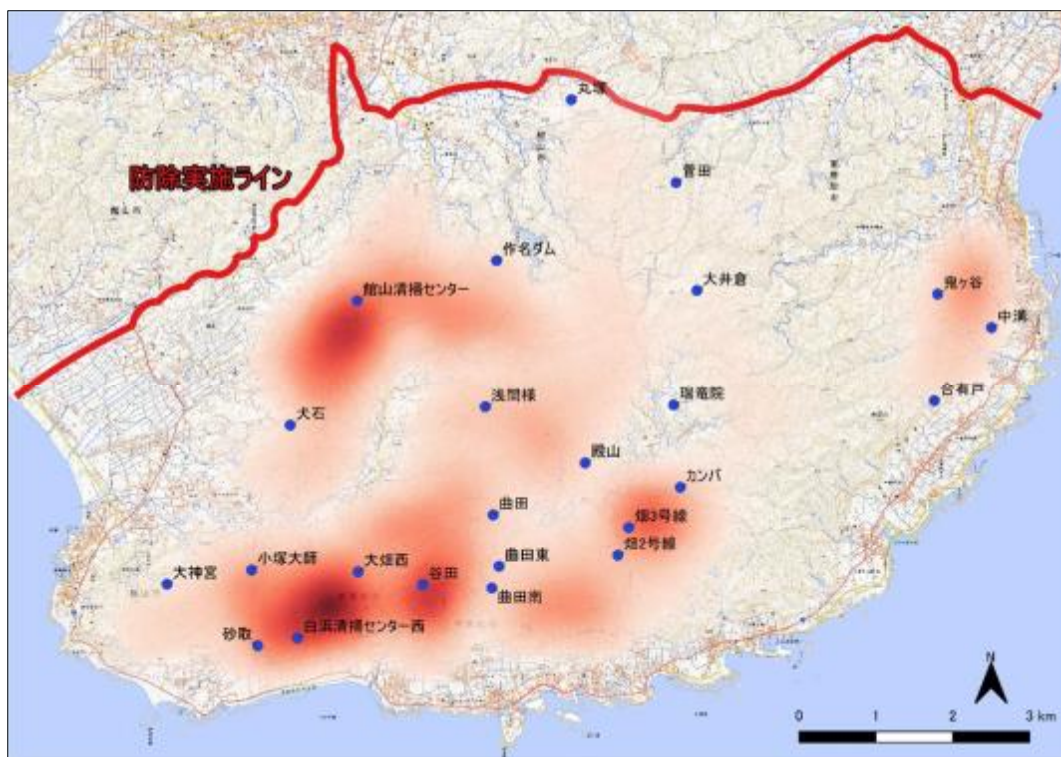


図 9 令和 6 年度（2024 年度）集中防除区域内の重点利用場所

③ 推定生息頭数

令和 6（2024）年度末時点で、全 26 群（不明・調査中を含む）の推定生息数は 904～1,098 頭＋ α であった(表 2)。これは捕獲結果や生息状況調査、現場での目視記録等を基に調査員が協議し算定したものである。

表 2 群れ別の推定頭数（令和 6 年度(2024 年度)末時点）

地域	群れ名	推定頭数（R6年度）	備考
北側地域	ウルシ群	10～20頭程度	・ 2023年10月に7頭を部分カウントした。
	アスナロ群	40～50頭程度	・ 2024年2月に12頭を部分カウントした。 ・ 2025年1月に7頭を部分カウントした。
	ツツジ群	19頭以上	・ 2023年10月に19頭を部分カウントした。
	ナギ群	40～50頭程度	
	ツバキ群	20～100頭程度	・ ツバキ群の行動圏内で自動撮影カメラに77頭撮影されたが、ツバキ群であるか否かは特定できなかった。
	モミノキ含む群れ（調査中）	50頭程度	※ツバキ群と同一の可能性がある。
	アオダモ群	19頭以上	・ 2024年1月に60～90頭と推定し、1月に54頭を捕獲した。 ・ 2024年7月に自動撮影カメラでアオダモ群と思われる残存個体が19頭撮影された。
	カンナ含む群れ（調査中）	残存個体数を調査中	・ 2025年8月に26頭を捕獲した。 ※アオダモ群と同一の可能性がある。
西側地域	ミヤコ・クワ群	10～20頭程度	・ 2023年12月の自動撮影カメラを用いたカウント調査で19頭以上と推定された。
	エダマメ・ナシ群	68頭	・ 2024年10月に全頭カウントした。しかし、一時的に別群が合流していた可能性も示唆される。
	ヒメオウギ群	57～61頭以上	・ 2024年1～2月に107頭を捕獲した。 ・ 2024年11月に自動撮影カメラ調査で最大61頭と推定されたが、一時的にエダマメ・ナシ群と合流していた可能性も示唆される。
	コンブ群	10～30頭程度	
	タキミ群	56頭程度	・ 2024年12月に自動撮影カメラで最大83頭の部分カウントをした。
	スズシロ・キノコ群	26頭以上	・ 2024年2月に27頭を捕獲した。
			・ 2024年1月に16頭を捕獲した。 ・ 2024年12月に自動撮影カメラで26頭の部分カウントをした。
中央地域	スゲ群	10～20頭程度	・ 2025年1月に11頭を捕獲した。
	オタキ群	10～30頭程度	
	アリドオン群	不明	（生息情報なし）
	ポビー・キンセンカ群	50頭程度	・ 2024年1月に20頭を部分カウントした。 ・ 2024年3月に47頭を捕獲した。
	モウセンゴケ群	不明	
	スダジイ群	278頭以上	・ 2025年2月に23頭を捕獲した。
	メヒシバ群	不明	
	ボブラ群	不明	・ 規模が大きい可能性が示唆されている。
東側地域	アジサイ群	50～60頭程度	・ 2024年12月に部分カウントした。
	ヨモギ群	11頭以上	・ 2025年3月に自動撮影カメラでヨモギ群と思われる11頭が撮影された。
	センリョウ群	20～30頭程度	
	ツルウメ群	50頭以上	・ 2021年に48頭の部分カウントをおこなっている。 ・ 2023年11月に15頭まで部分カウントした。

(3) 考察

① 第2次計画の成果

群れ規模の縮小

100 頭以上の大規模群の存在の確認が減少し、群れサイズの縮小化が進んでいることが推測される。これは分布拡大抑制や捕獲の成果を反映していると考えられる。

分布拡大の抑制

計画初期には分布域が急速に拡大していたが、第2次計画期間中においては拡大が一定程度抑制されている。これにより、防除実施ラインを大きく超えるような群れの出現は限定的となっている。

自動撮影カメラによるカウント調査の有効性

山林内など直接的な目視調査が困難な環境においても、自動撮影カメラを活用することで個体数把握が可能であることが示された。これにより、従来の目視中心の調査を補完し、より広域かつ効率的なモニタリングが可能となっている。

根絶寸前の群れにおける自動撮影カメラの有効性

令和5（2023）年度にヒメオウギ群については群れの推定頭数を上回る捕獲があった。その根絶確認において、残存個体が周辺の群れと合流・分派を繰り返している可能性が示され、ニホンザルとは異なるアカゲザル特有の行動特性の事例を確認している。

② 今後の課題

目視による生息数把握の課題

アカゲザル等は樹上性が高く警戒心が強いため、直接目視する機会が少ない。さらに、行動域の多くを道路や道のない山間部が占めており、ニホンザルと同様な方法で群れ全体の個体数を把握することは極めて困難である。

自動撮影カメラによる群れの特定の課題

アカゲザル等は群れ間で行動域が重複するため、対象群れに発信器装着やGPS測位がなされていない場合、群れの特定が困難となる。また、撮影範囲内に群れの全個体を収めることは難しく、結果として目視調査に比べて個体数カウントの精度が低下する。このため、生息状況の把握に不可欠な基礎データの精度確保が依然として課題となっている。

発信器装着の継続性

群れ追跡のために用いる発信器は、電池寿命を迎えると情報取得が途絶するが、行動域に占める山間部の割合が多いため、檻の設置や群れの誘引が難しく、捕獲作業が難航している。この捕獲困難な状況から継続的な装着が十分に行えない現状があるため、今後も多

数の発信器が寿命切れを迎える可能性があり、群れ追跡・行動把握の継続性が課題となっている。

2. 捕獲の取組み状況

(1) 捕獲方法

千葉県アカゲザル防除実施計画に基づく防除及び追跡を目的とし、小型檻と大型檻を用いて捕獲を実施した。餌は主にサツマイモとミカンを用い、適宜、トウモロコシやリンゴ、その他の野菜類なども用いた。

小型檻と大型檻の運用目的については、以下に整理する。

■小型檻（4～7 箇所、8～14 基）

電波発信器を用いたアカゲザル等の群れの継続的な行動特性調査（1.（2））を行ない、効果的な捕獲に資する情報を収集するため、小型檻を用いた新規装着個体の捕獲をおこなった（写真 3）。

■大型檻（18～24 箇所、21～27 基）

アカゲザル等を野外から速やかに除去することを目的として、大型檻を用いて捕獲を実施し、群れの規模縮小や根絶を図った（写真 4、5）。



写真 3 小型檻



写真 4 大型箱わなと移設



写真 5 固定式大型檻

ア. ICT 機器の活用

檻の見回りや餌付き状況の確認等の労力を軽減するため、通信機能の付いた自動撮影カメラを運用した（写真 6、7）。また、大型檻での捕獲については、ネットワークカメラで檻内映像の確認が可能で、遠隔操作により檻の扉を閉めることができる機器を運用し、捕獲の効率向上に努めた（写真 8、9）。



写真6 通信機能付きカメラ設置例



写真7 通信機能付きカメラの撮影画像



写真8 まるみえホカクン



写真9 遠隔操作式落とし扉

イ. 移設、新設について

大型檻の数については、1つの群れに対して1箇所程度が効率的とされてきたが、令和4（2022）年度事業を以て確認されていた全22群よりも上回る23箇所の檻設置を実施した。

更に、長く捕獲を継続してきたことで群れの分裂・合流や、利用場所の変化がみられるようになり、既存の大型檻への来訪頻度が減少する事例が確認され始めている。

これらの状況を踏まえて、本事業では近年の生息状況調査の結果を再度見直し、地域区分に関わらず群れ捕獲を推進するため、捕獲効率の向上が見込める場所に大型檻を設置することとした。

檻の設置種別、位置を図6にまとめた。

表 3 大型檻の設置状況

地域区分	檻名	檻の形式	建設年数	稼働年数	稼働状況
北側地域	館山清掃センター	固定式	H27	8.5	稼働中
	浅間様	固定式	H29	6.5	稼働中
	作名ダム	移設式	H30	5.5	稼働中
	犬石	移設式	R2	3.5	稼働中
	大井倉	固定式	R2	3.5	稼働中
	菅田	移設式	R3	2.5	稼働中
	丸塚	移設式	R4	1.5	稼働中
西側地域	小塚大師	移設式	H18	17.5	R7撤去済
	大畑西	固定式	H19	16.5	稼働中
	白浜清掃センター西	固定式	H19	16.5	稼働中
	大神宮	移設式	R2	3.5	稼働中
	砂取	移設式	R5	0.5	稼働中
	大畑	固定式	不明	不明	稼働中
	白浜清掃センター	固定式	不明	不明	稼働中
中央地域	曲田	固定式	H20	15.5	稼働中
	曲田南	固定式	H23	12.5	稼働中
	畑2号線	固定式	H30	5.5	稼働中
	曲田東	移設式	R2	3.5	稼働中
	谷田	移設式	R3	2.5	稼働中
東側地域	カンバ	固定式	H26	9.5	稼働中
	瑞龍院	移設式	H29	6.5	稼働中
	鬼ヶ谷	移設式	H30	5.5	R7撤去予定
	合有戸	固定式	R2	3.5	稼働中
	中溝	移設式	R3	2.5	稼働中
	畑3号線	移設式	R6	0.0	稼働中

エ. 小型檻による捕獲実施状況

小型檻については、毎年現場の状況や対象の群れ等に合わせて臨機応変に捕獲場所等を変更しているため、檻の設置場所や基数等の詳細情報については割愛する。

(2) 捕獲データ及び分析結果

① 累積捕獲数

平成 17（2005）年度から令和 6（2024）年度までの捕獲数の推移を図 7 に示す。

業務実施中の令和 7（2025）年度を除く第 2 次計画期間中（令和 3（2021）年度から令和 6（2024）年度）の合計捕獲頭数は計 724 頭で、第 1 次計画期間中と比較すると捕獲数は減少傾向にある。

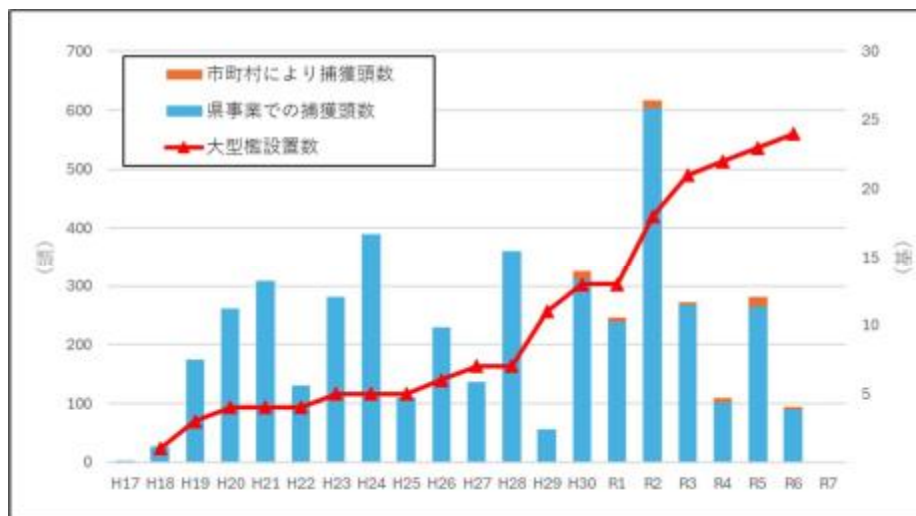


図 7 累計捕獲数型檻設置基数の年次推移
（平成 17（2005）年度から令和 6（2024）年度）

② 1 箇所あたりの捕獲頭数

大型檻 1 箇所あたりの捕獲頭数は、毎年度凹凸を繰り返しながら減少傾向にある（図 8）。考えられる原因は様々にあるが、①既存の檻の周辺で大規模な群れを大量捕獲したことにより、その檻周辺における生息数が減少してその後の捕獲が無くなったこと、②捕獲方針の変化、③毎年の食物資源量、④群れの集中利用域と檻の位置の乖離、⑤長期的な捕獲によって警戒心の高い個体が発生していること等が挙げられる。



図8 大型檻1箇所あたりにおける捕獲頭数の年次推移

- ※ 3年ごとの移動平均とは、過去3年間（令和元年度であれば平成29（2017）年度から令和元（2019）年度まで）の捕獲頭数の平均値のこと
- ※ グラフ上の赤点線は、計画改定年を表す

③ 檻設置年数ごとの平均捕獲頭数

大型檻（計24箇所）について、設置年数ごとの平均捕獲頭数を算出した（図9）。最も平均捕獲数が多かったのは建設後6年目、次いで18年目、15年目、3年目、4年目であった。また、どの年数においてもおよそ10頭以上の捕獲があることがわかった。

なお、運用している全ての大型檻について、檻の種類やサイズ、餌付き状況や稼働・非稼働の有無を加味せず集約・統合して算出している点に留意が必要である。

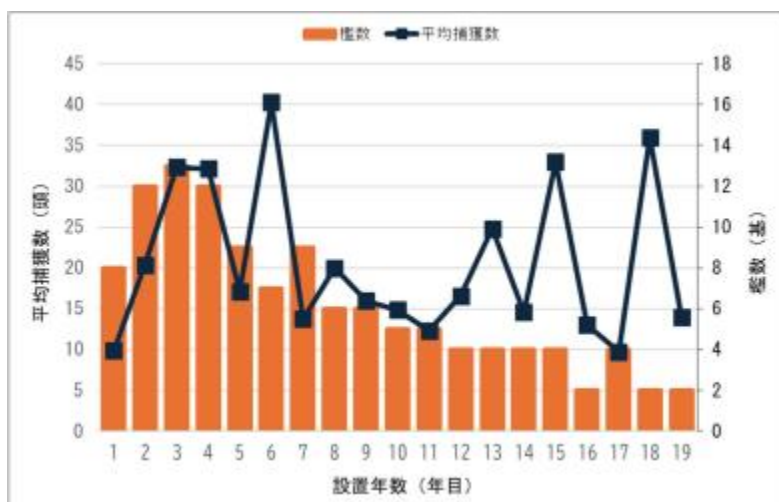


図9 大型檻の設置年数ごとの平均捕獲頭数

④ 設置年数ごとの捕獲頭数

大型檻（計 24 箇所）について、地域別に設置年数ごとの捕獲数を図化した結果、多くの檻で設置年数が浅い時期に捕獲数が多く、設置年数が長期化するにつれて捕獲数が減る傾向がみられた（図 10）。こうした傾向は、檻周辺に生息していた群れを捕獲し生息がなくなったことや、残存個体が檻の危険性を学習し、檻を忌避したことなどの様々な要因が考えられる。

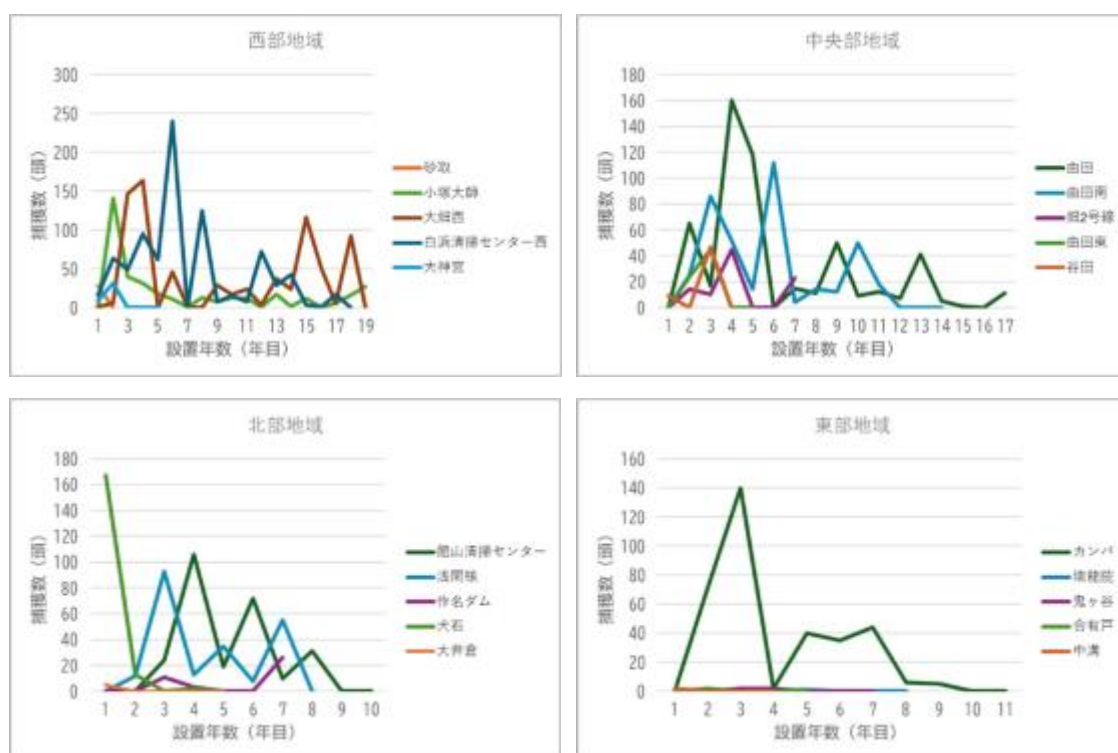


図 10 設置年数ごとの捕獲頭数（地域別）

⑤ 月別の捕獲数

月別の捕獲頭数は1月が最も多く、次いで7月、2月、3月、8月の順に多かった（図 10）。この時期はアカゲザルにとっての餌資源が少なく、大型檻の餌に誘引されて餌付くことで捕獲されやすくなっていると考えられる。

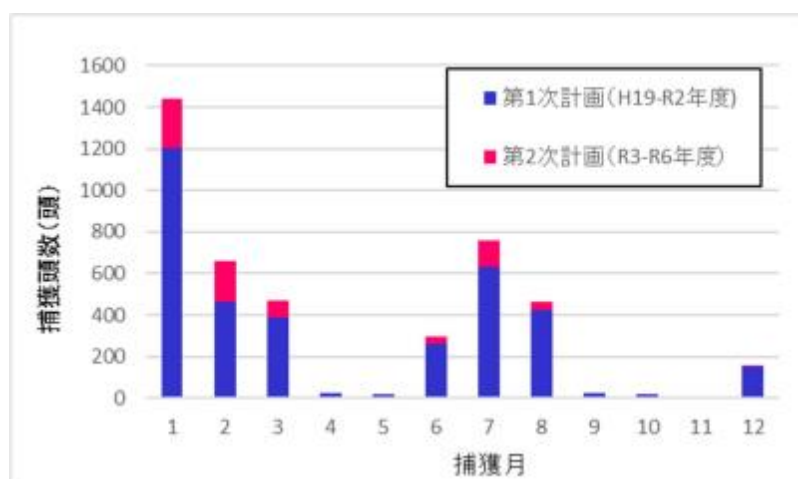


図 10 月別の捕獲頭数

※平成 19（2007）年度から令和 6（2024）年度に捕獲されたアカゲザル等の個体データを用いた

※4、5、9、10、11 月は餌付かないことから、大型檻の稼働回数が少ない点に留意が必要

⑥ 群れごとの捕獲数

群れごとの捕獲頭数を表4に取りまとめた。第2次計画期間中に最も多く捕獲された群れは西側地域に分布するヒメオウギ群で203頭の捕獲があった。その他に捕獲数が多かったのは北側地域のアオダモ群や中央地域のスダジイ群とポピー・キンセンカ群で、50頭を超える捕獲が行われた。

表4 群れごとの捕獲状況

地域区分	群名	推定頭数	R3年度	R4年度	R5年度	R6年度	小計
北側地域	アオダモ群	19以上	1	8	54		63
	アオダモ群（ハヤブサ群）						0
	アスナロ群	40～50程度	4	30			34
	ウルシ群	10～20程度	45		2		47
	カンナ群	調査中				26	26
	ツツジ群	19以上				1	1
	ナギ群	40～50程度	1				1
	ツバキ群	20～100程度					0
西側地域	エダマメ・ナシ群	68		3			3
	エダマメ・ナシ群、ススキ集団						0
	エダマメ・ナシ群、スズシロ・キノコ群						0
	ミヤコ・クワ群	10～20程度	10				10
	ミヤコ群						0
	クワ群						0
	コンブ群	10～30程度					0
	タキミ群	56程度		1		27	28
	タキミ群、エダマメ・ナシ群						
	ヒメオウギ群	57～61以上	62	6	135		203
	スズシロ・キノコ群	26以上			16		16
	スズシロ・キノコ群、エダマメ・ナシ群						0
	スズシロ集団						0
	スズシロ集団、クワ集団						0
中央地域	オタキ・ススキ群	10～30程度					0
	オタキ群		34	2			36
	ススキ集団						0
	オタキ群、エダマメ・ナシ群						0
	オタキ群、スダジイ群						0
	スゲ群	10～20程度		1		11	12
	スゲ群、スダジイ群		2				2
	スダジイ群	278以上	43	44		23	110
	モウセンゴケ群	不明					0
	（アリドオン群）	不明					0
	（メヒシバ群）	不明	3				3
	ポピー・キンセンカ群	50程度	11		47		58
東側地域	アジサイ群	50～60程度	1				1
	センリョウ群	20～30程度	3				3
	ツルウメ群	50以上	5				5
	（バンジー群）	不明					0
	ヨモギ群	11以上	2	5			7
	ヨモギ群、センリョウ群						0
不明			41	2	9	2	54
各年度の延べ捕獲数			268	102	263	90	723

※カッコ書きは、令和6年度末時点で2年以上確認されておらず、存在が不明な群れ

※捕獲頭数は電波発信器装着個体を含む頭数

※太枠は、分合流により1つの群れと判断できなかったものをまとめた枠

そのうち灰色で示す群れは、分合流により一時的に存在した群れを表す。

⑦ 檻別捕獲数

第2次計画期間中の檻別捕獲数を表5に取りまとめた。最も捕獲数が多かったのは、エダマメ・ナシ群とヒメオウギ群、スズシロ・キノコ群、ポピー・キンセンカ群を対象とした大畑西の149頭で、次いでアオダモ群、ヒメオウギ群、カンナ群を対象とした浅間様の98頭、オタキ群、ポピー・キンセンカ群、スダジイ群を対象とした曲田東の69頭の順で多かった。

表5 檻別捕獲数

地域区分	檻名	檻の形式	建設年数	稼働年数	R3	R4	R5	R6	総計	捕獲できる群れ (2024年度末時点)
北側地域	館山清掃センター	固定式	H27	8.5	10	31			41	アスナロ群、カンナ含む群れ、ツツジ群
	浅間様	固定式	H29	6.5	35	8	55		98	アオダモ群、ヒメオウギ群、カンナ含む群れ
	作名ダム	移設式	H30	5.5	3			26	29	アオダモ群、カンナ含む群れ、モミノキ含む群れ、ツツジ群
	犬石	移設式	R2	3.5	13		2		15	モミノキ含む群れ
	大井倉	固定式	R2	3.5					0	モミノキ含む群れ、センリョウ群、アジサイ群
	菅田	移設式	R3	2.5					0	モミノキ含む群れ、アジサイ群
	丸塚	移設式	R4	1.5					0	モミノキ含む群れ
西側地域	小塚大師	移設式	H18	17.5		6	16	27	49	エダマメ・ナシ群、ヒメオウギ群、スズシロ・キノコ群
	大畑西	固定式	H19	16.5	51	5	92	1	149	エダマメ・ナシ群、ヒメオウギ群、スズシロ・キノコ群、ポピー・キンセンカ群
	白浜清掃センター西	固定式	H19	16.5	3	1	17		21	エダマメ・ナシ群、ヒメオウギ群、スズシロ・キノコ群
	大神宮	移設式	R2	3.5	31				31	ヒメオウギ群、ミヤコ・クワ群
	砂取	移設式	R5	0.5			28		28	エダマメ・ナシ群、ヒメオウギ群、スズシロ・キノコ群
	大畑	固定式	不明	不明					0	既に取壊し済み
	白浜清掃センター	固定式	不明	不明					0	既に取壊し済み
中央地域	曲田	固定式	H20	15.5	5	1		11	17	アオダモ群、ヒメオウギ群、オタキ群、ポピー・キンセンカ群、スダジイ群
	曲田南	固定式	H23	12.5	18				18	オタキ群、ポピー・キンセンカ群、スダジイ群
	畑2号線	固定式	H30	5.5	45				23	スダジイ群、ヨモギ群
	曲田東	移設式	R2	3.5	24	45			69	オタキ群、ポピー・キンセンカ群、スダジイ群
	谷田	移設式	R3	2.5	9		47		56	ヒメオウギ群、ポピー・キンセンカ群
東側地域	カンバ	固定式	H26	9.5	6	5			11	センリョウ群、スダジイ群、ヨモギ群、ボブラ群
	瑞龍院	移設式	H29	6.5	1				1	モミノキ含む群れ、センリョウ群、ボブラ群、アジサイ群
	鬼ヶ谷	移設式	H30	5.5	2				2	ツルウメ群
	含有戸	固定式	R2	3.5	2			1	3	ツルウメ群
	中溝	移設式	R3	2.5	2				2	ツルウメ群
	畑3号線	移設式	R6	0.0					0	スダジイ群、ヨモギ群
各年度の延べ捕獲数					260	102	257	89	708	

※捕獲できる群れ：檻の設置位置に行動域を有する群れ

※大型檻以外での捕獲数は含まない

⑧ 捕獲個体の性・齢区分割合

捕獲個体の性・齢区分を表6に、割合を図11に図示した。大型檻を用いた捕獲は、一度に多数の個体を捕獲でき、雌雄や齢区分に偏りなく捕獲できることから、群れで行動するアカゲザル等の生息数の抑制に特に有効な手法と言える。

また、第1次計画期間（平成18（2006）～令和2（2020）年度）と第2次計画期間のうち4年間（令和3（2021）～令和6（2024）年度）で比較すると、後者においてよりメスを捕獲した割合が高くなった。これは、第2次計画期間において、群れごと捕獲が推進され、繁殖や群れの凝集性に関わるオトナメスの檻への馴化状況をより重視した稼働判断に変更したことが影響していると考えられる。

なお、本データはあくまでも捕獲された個体の内訳であり、実際の群れの構成ではない

という点に留意が必要である。

表 6 捕獲個体の性・年齢区分の別

年度		メス				オス				性別不明	総計
		オトナメス	アカンボウメス	コドモメス	ワカモノメス	オトナオス	アカンボウオス	コドモオス	ワカモノオス		
2005	H17		1		1						2
2006	H18	2	1	6	7	6	1	1	3		27
2007	H19	32	2	18	20	41	6	18	12	2	151
2008	H20	53	14	26	31	58	16	36	26		260
2009	H21	61	13	48	19	53	9	71	25		299
2010	H22	25	3	37	10	10	1	30	2		118
2011	H23	57	21	41	21	38	11	66	15	1	271
2012	H24	112	22	83	29	19	18	88	11	1	383
2013	H25	12	7	8	9	23	2	25	13	2	101
2014	H26	49	15	44	7	32	19	44	14		224
2015	H27	21	4	18	10	37	3	18	6		117
2016	H28	94	24	55	27	55	26	64	8		353
2017	H29	11	1		1	24		11	7		55
2018	H30	77	21	43	24	57	9	62	19		312
2019	R1	61	15	36	8	23	8	66	22		239
2020	R2	212	33	93	22	84	39	88	31		602
2021	R3	114	8	26	12	44	9	37	18		268
2022	R4	32	2	22	10	9	6	17	4		102
2023	R5	74	25	41	22	28	19	38	17		264
2024	R6	25		15	8	19	2	16	5		90

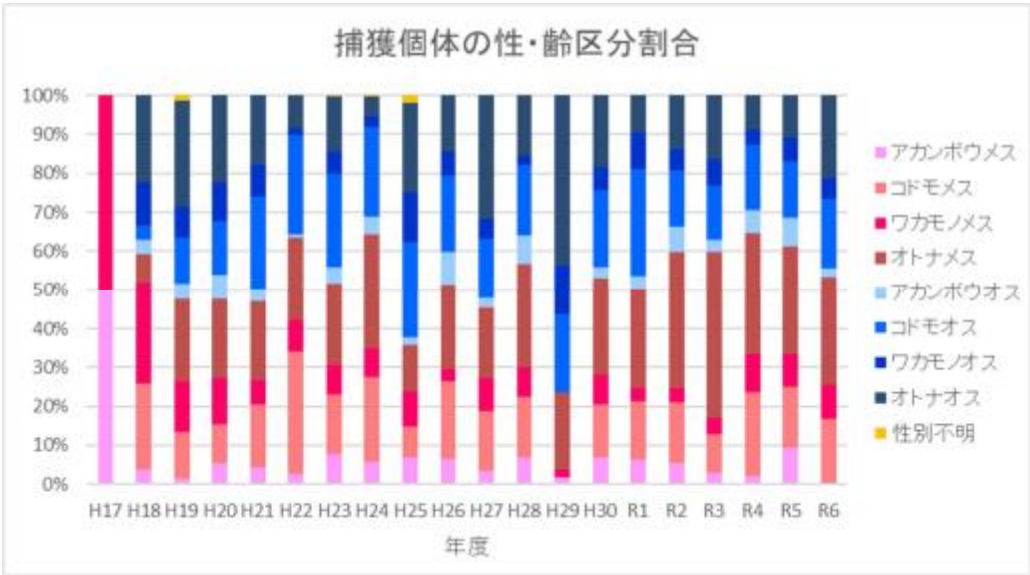


図 11 大型檻における捕獲個体の性・年齢区分別割合

※捕獲手法の別は考慮していない

⑨ 捕獲個体の子連れ率

平成 18（2006）～令和 6（2024）年度の累積捕獲数のうちアカンボウとオトナメスの数

を用いて子連れ率（アカンボウ/オトナメス）を算出した結果（図 12）、 $41.2 \pm 23.5\%$ という数値が得られた。アカゲザルの繁殖率は生息数や食物資源量により大きく変動するが、原産地での出生率は 43～91%とされている（Cooper, 2022）。原産地と比較すると、房総半島のアカゲザル等の子連れ率は同等かわずかに低い数値であった。

ただし、本データはあくまでも捕獲された個体の内訳であり、実際の群れの子連れ率を反映するものではない。また、移設式大型檻については、アカンボウがワイヤーメッシュの目合いを容易に通ってしまうため、捕獲ができていないというデメリットもある。子連れ率が過小評価になっている可能性がある点に留意が必要である。

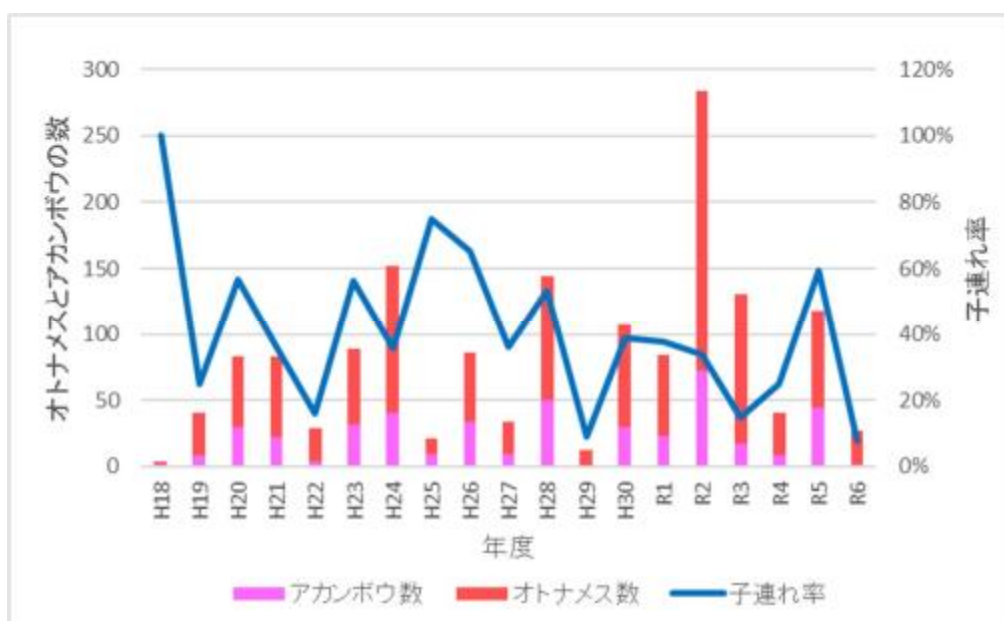


図 12 捕獲個体から算出した子連れ率（アカンボウ/オトナメス）

※捕獲手法の別は考慮していない

（３） （補足） 有害鳥獣捕獲によるアカゲザル等捕獲数

館山市及び南房総市で実施されたアカゲザル等の有害捕獲数を図 13 に示した。最も捕獲数が多かったのは令和 5（2023）年度の 17 頭で、平成 30（2018）年度以降のアカゲザル等の累積捕獲数は 66 頭であった。

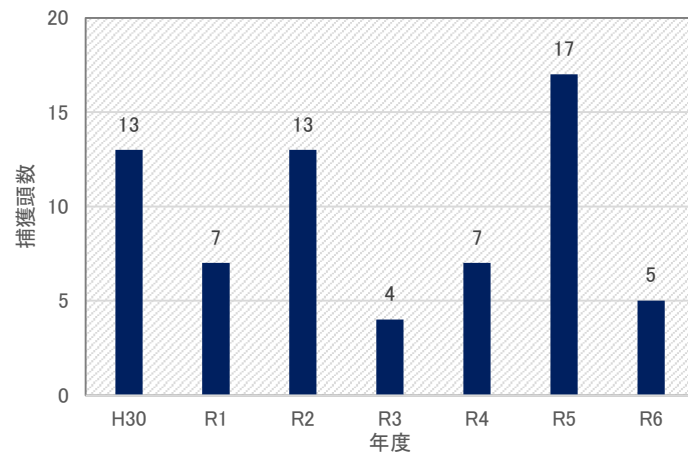


図 13 有害鳥獣捕獲によるアカゲザル等捕獲数

(4) 考察

① 第2次計画の成果

固定式の大型檻を導入し、群れの規模縮小を目的とした捕獲を行うことによって、23 群中約半数の 13 群が 50 頭程度または以下の規模の群れになったと推察され、全頭捕獲が可能な個体数まで群れの規模を縮小することができた。

② 今後の課題

大型檻には、設置コストが高いことや、周辺の餌等の環境に捕獲成果が大きく影響すること等の短所がある。また、捕獲圧を強化することで群れの行動域や集中利用域は頻繁に変化することから、群れの行動に合わせて大型檻を適宜適所に移設する等迅速な対応が防除の加速化に繋がる。防除開始当初より大型檻による捕獲を継続的に実施している地域では、大型檻への警戒心の高まり等による捕獲効率の低下も示唆されていることから、今後は、大型檻での捕獲を補完する新たな捕獲手法についても検討する必要がある。

加えて、個体数を把握できている群れが一部に留まっており、捕獲の効果を十分に評価することが難しい状況であることから、個体数カウント調査等を継続し、群れごとの個体数や性・年齢構成等を把握する必要がある。

多くの群れの規模縮小に至ったが、防除の手が入りにくい山間地を中心にいまだ 200 頭以上の群れの生息も示唆されているため、引き続き生息数の抑制に十分な捕獲圧をかけていく必要がある。

3. 群れ毎の情報

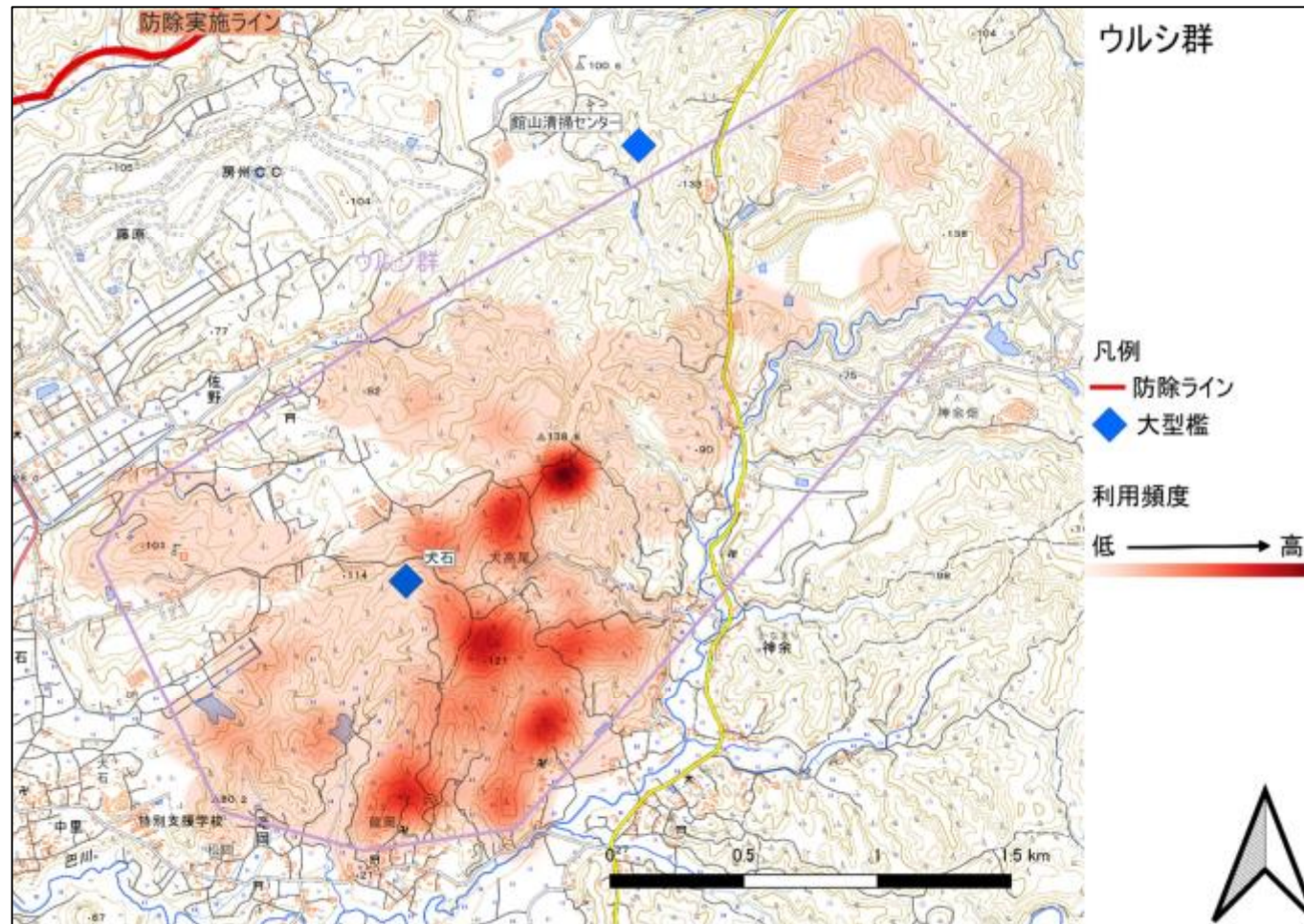
令和6年度に確認ができている群れは全26群で地域別の群れ区分は以下のとおりになる（表6）。

表6 地域別群れ区分

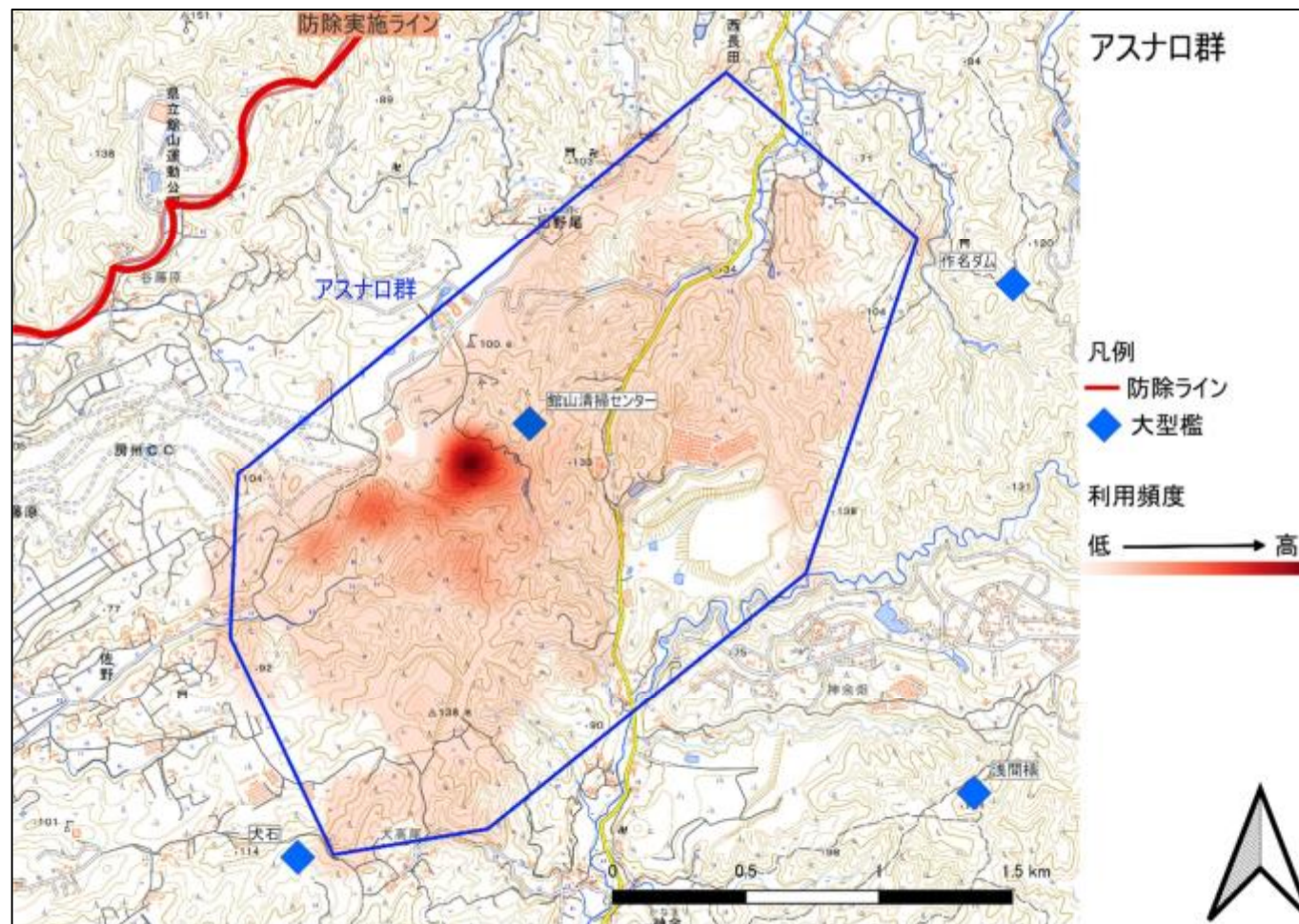
北側地域：8群	西側地域：6群	中央地域：8群	東側地域：4群
ウルシ群	ミヤコ・クワ群	スゲ群	アジサイ群
アスナロ群	エダマメ・ナシ群	オタキ群	ヨモギ群
ツツジ群	ヒメオウギ群	アリドオシ群	センリョウ群
ナギ群	コンブ群	ポピー・キンセンカ群	ツルウメ群
ツバキ群	タキミ群	スダジイ群	
モミノキ含む群れ	スズシロ・キノコ群	ポプラ群	
アオダモ群		メヒシバ群	
カンナ含む群れ		モウセンゴケ群	

次頁以降に群れごとの情報を取りまとめた。取りまとめにおいては、取得できた測位データの数によって測位点（月ごと）またはヒートマップ（1年またはそれ未満）のいずれかで図示した。

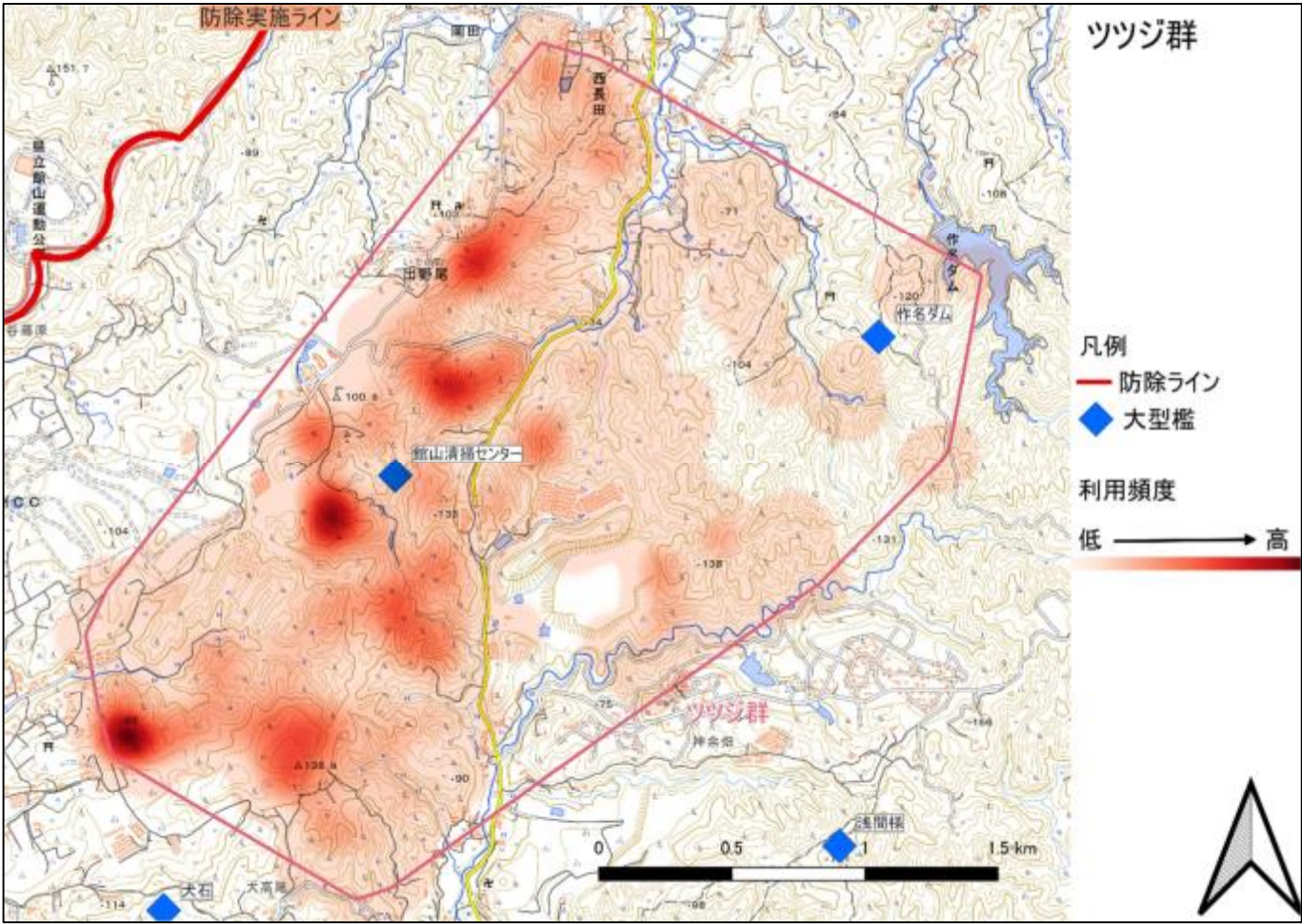
(1) 北側地域



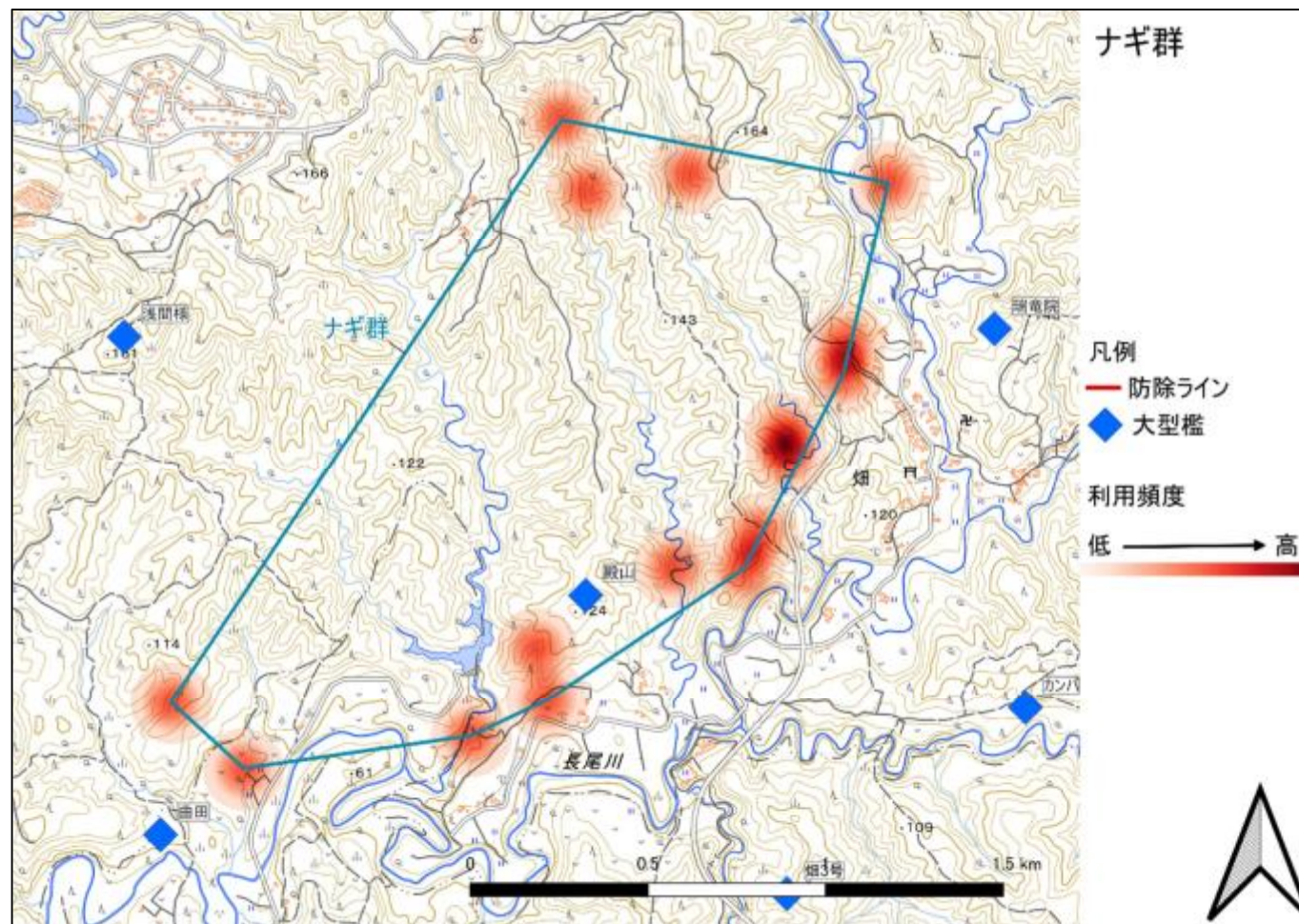
群れ名	ウルシ群
群れの確認年	2012年：中山トンネル群 (仮) 2016年：ウルシ群
行動追跡調査の開始年	2016年
これまでの経緯	2016年に発信器が装着されたことからウルシ群と命名。 過去に20kmを行動域を有する県内のアカゲザル等において最大規模の群れであったが、2019年度以降捕獲が進んだことで行動域の縮小が進んでいた。しかし、今年度、再び行動域の拡大がみられた。
追跡調査の実施状況	継続追跡中
累積捕獲数(頭)	510
推定個体数	10～20頭
重点利用場所	行動域内の中心部(大高尾)を集中的に利用
特記事項	—



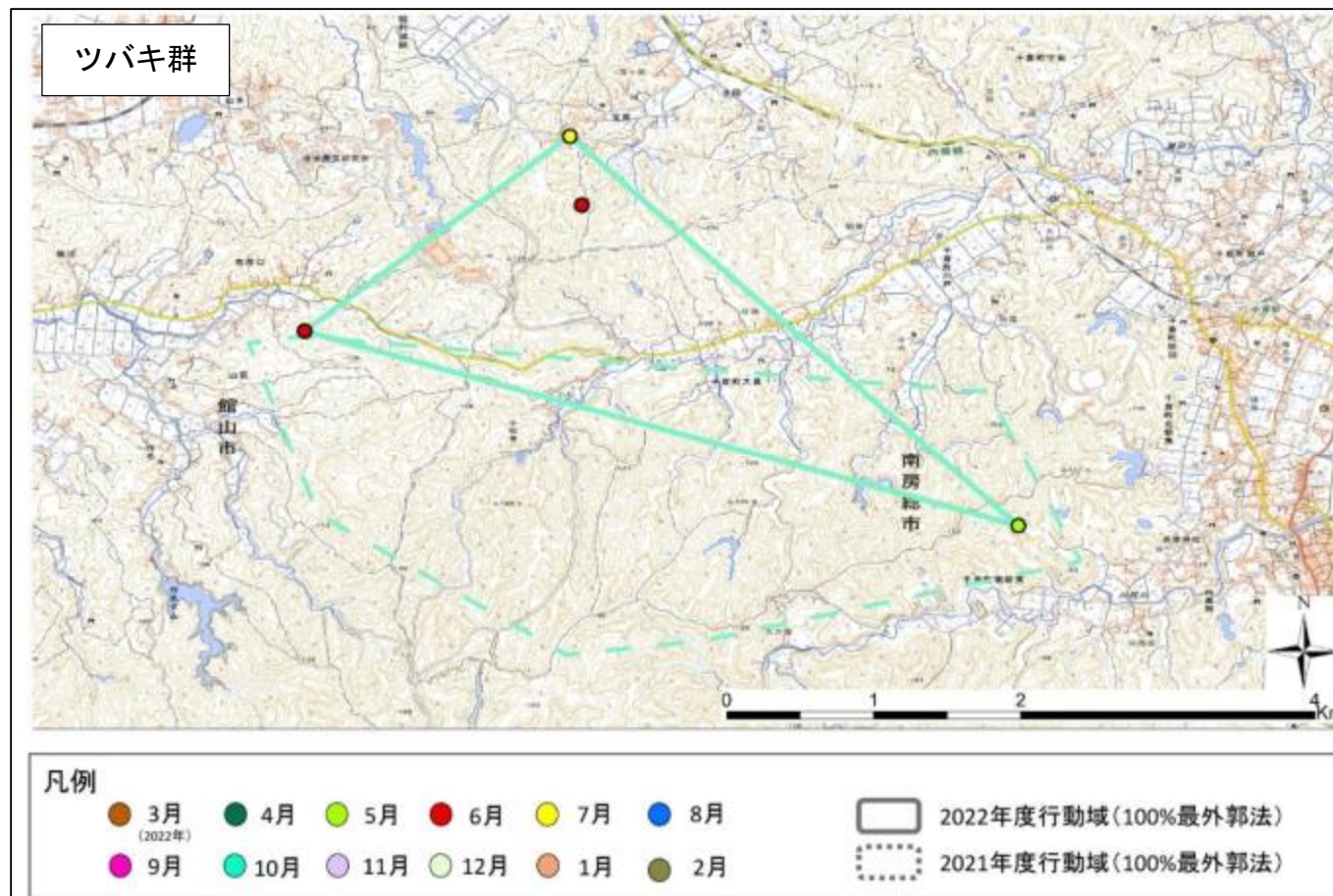
群れ名	アスナロ群
群れの確認年	2020年
行動追跡調査の開始年	2020年
これまでの経緯	2020年にアスナロ及びツリバナに発信器が装着されたことからアスナロ群と命名。群れの規模は10頭程度と考えられたが、捕獲エリアにはオスグループの集団が多く捕獲されており、オスグループが群れに入り込むことで群れの規模に変化が生じている可能性がある。
追跡調査の実施状況	継続追跡中
累積捕獲数(頭)	77
推定個体数	40～50頭
重点利用場所	行動域内の南西側(館山CC)を集中的に利用
特記事項	ツツジ群と行動域の大部分が重複するが、ツツジ群よりも行動域は狭い



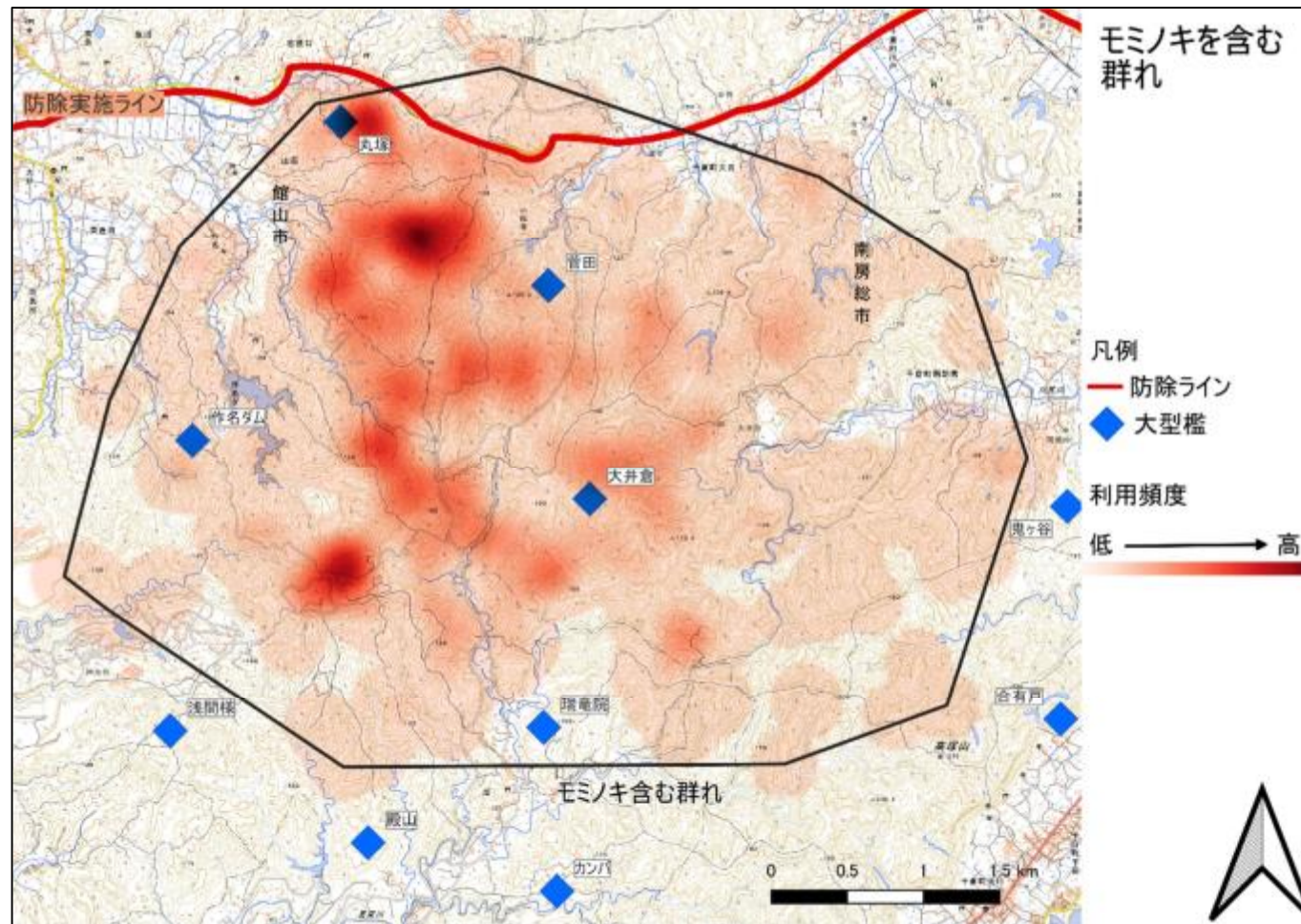
群れ名	ツツジ群
群れの確認年	2022年
行動追跡調査の開始年	2023年
これまでの経緯	2022年にアスナロ群からツツジとシンの分派行動がみられた。以降、アスナロ群とは別行動していたため、2023年からツツジ群として命名、確立した。
追跡調査の実施状況	継続追跡中
累積捕獲数(頭)	分派してから捕獲無し
推定個体数	19頭以上
重点利用場所	行動域内の南側(佐野)を集中的に利用
特記事項	アスナロ群から分派。アスナロ群と行動域の大部分が重複するがアスナロ群よりも行動域は広い



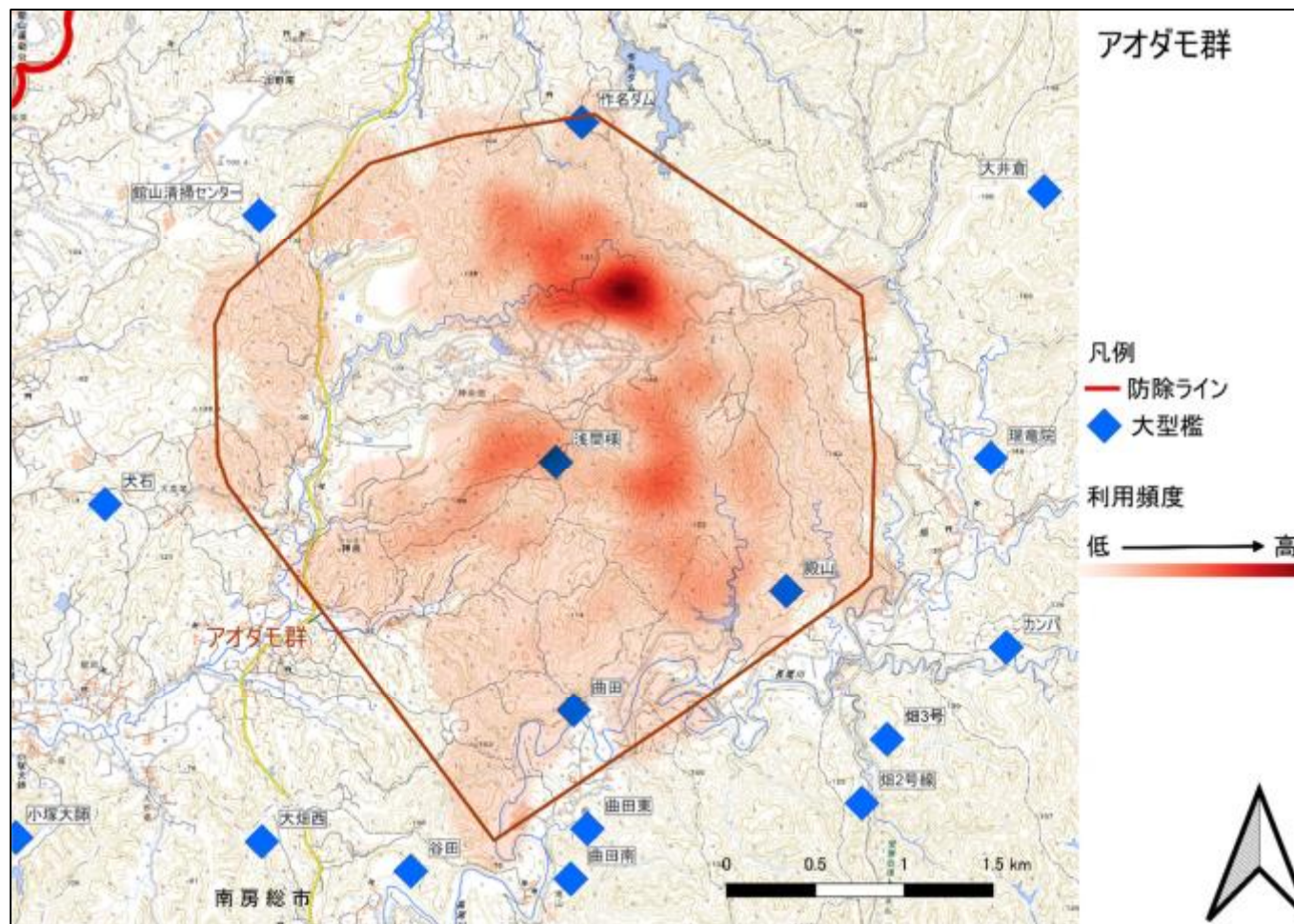
群れ名	ナギ群
群れの確認年	2018年
行動追跡調査の開始年	2019年
これまでの経緯	2018年に発信器が装着されたことからナギ群と命名。装着当初はハヤブサ集団と行動域が重複していたが、後の調査で行動を共にすることはなく2019年に別群と確認される。
追跡調査の実施状況	継続追跡中(測位停止)
累積捕獲数(頭)	11
推定個体数	40～50頭
重点利用場所	データ数が昨年と比べて大幅に減少したため、過小評価となるが、行動域内の東側(畑)を集中的に利用
特記事項	測位が停止したため、行動域は過小評価となっている



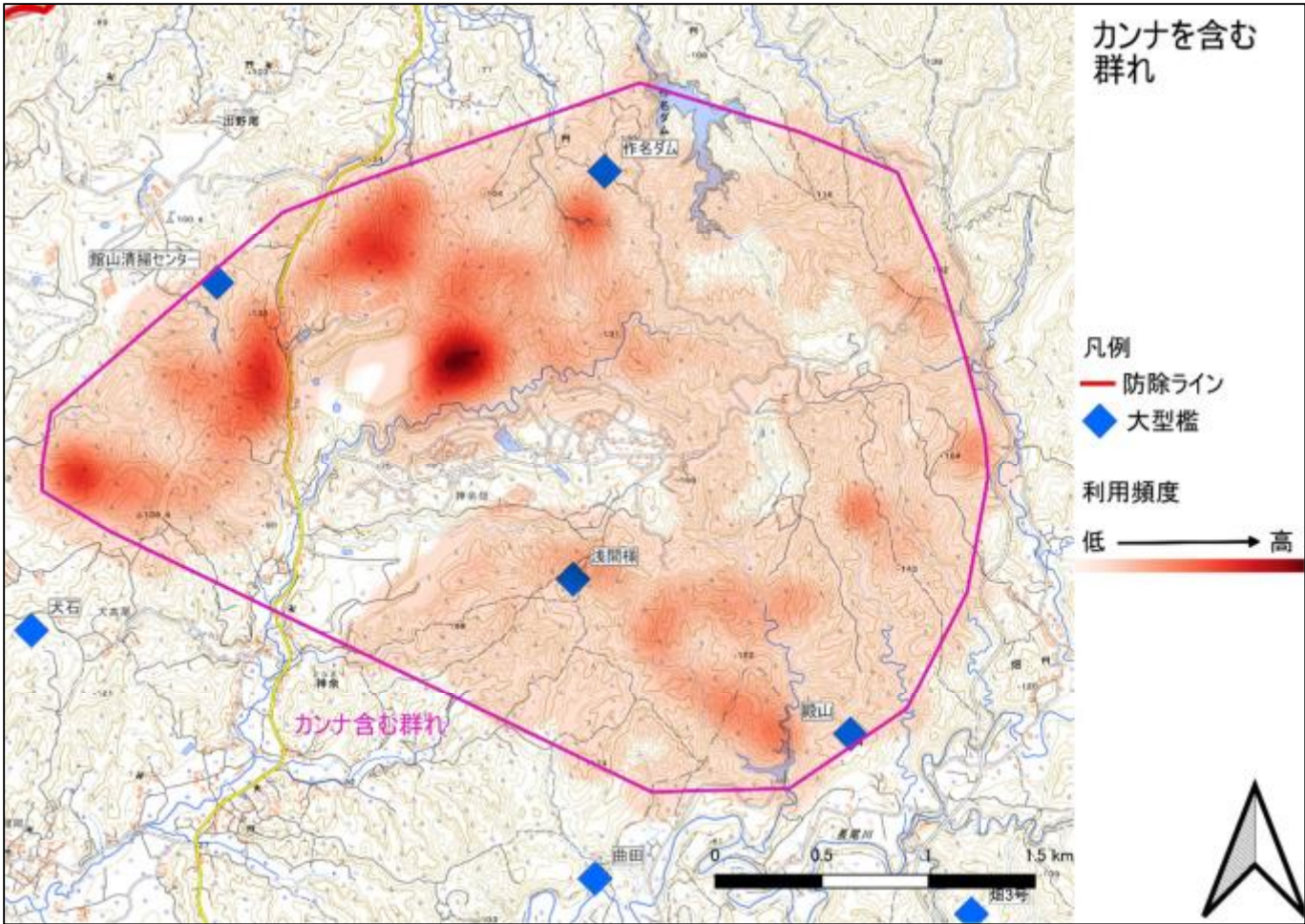
群れ名	ツバキ群
群れの確認年	2019年
行動追跡調査の開始年	2019年
これまでの経緯	2019年にオタキ・ススキ群から分裂し一方がツバキ群となる。 2020年には防除実施ラインを越えた地域も利用していることが確認されている。
追跡調査の実施状況	発信器の電池切れにより、2022年8月頃から追跡不可
累積捕獲数(頭)	分裂してから捕獲無し
推定個体数	20～100頭程度
重点利用場所	—
特記事項	発信器の電池切れにより、追跡できていない。モミノキと行動域が類似している



群れ名	モミノキ含む群れ
群れの確認年	2023年
行動追跡調査の開始年	2023年
これまでの経緯	2024年1月に発信器が装着され、所属する群れは不明である。 装着期間が短いため今後調査が必要であるが、ツバキ群と行動域は類似している。
追跡調査の実施状況	2024年11月に首輪が脱落し、追跡不可
累積捕獲数(頭)	捕獲無し
推定個体数	50頭程度
重点利用場所	行動域内の北側(山荻、東長田)を集中的に利用
特記事項	防除実施ラインを越える動きが確認され、ツバキ群と行動域が類似している

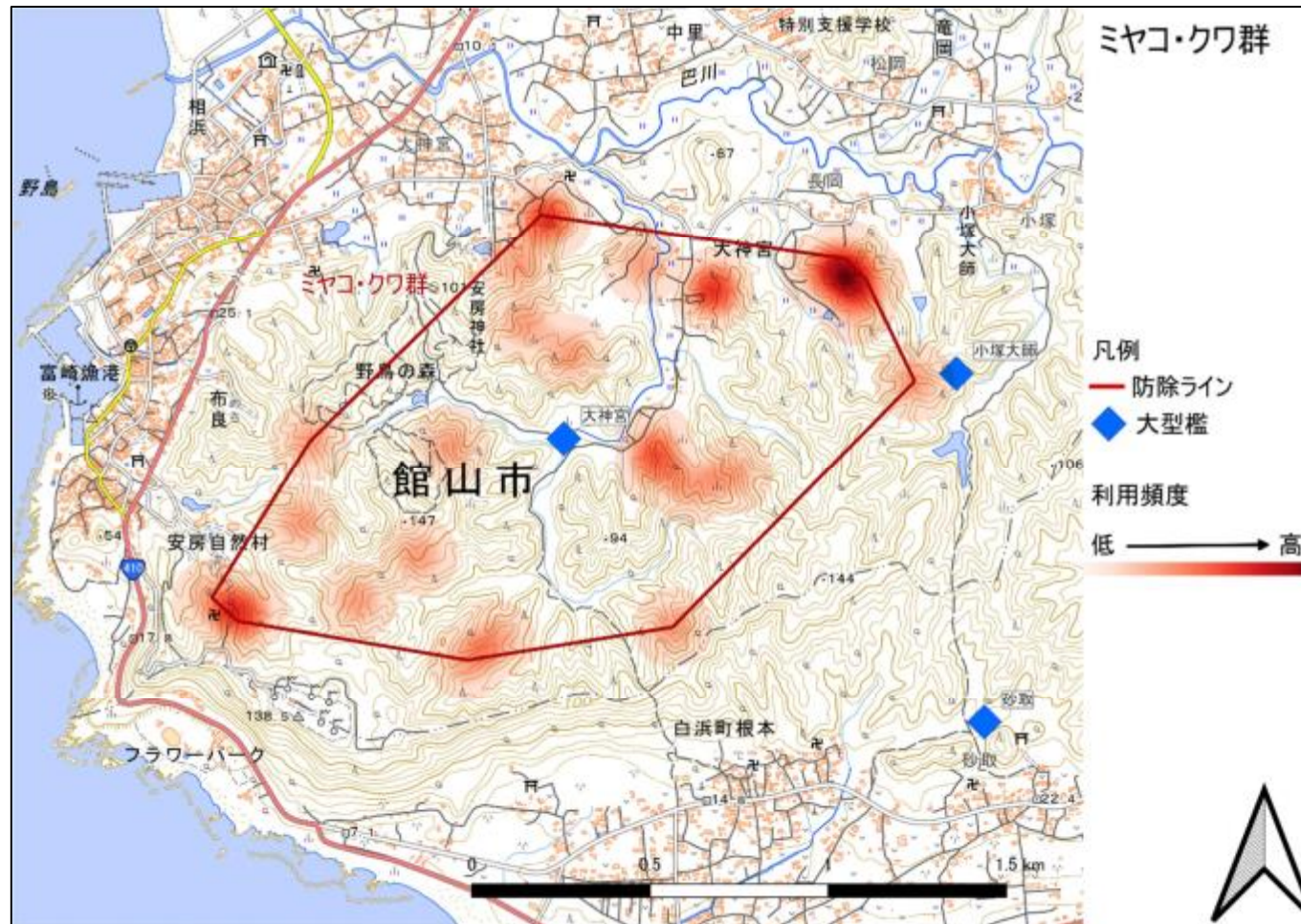


群れ名	アオダモ群
群れの確認年	2011年：カボチャ集団 2017年：ハヤブサ集団 2020年：アオダモ群
行動追跡調査の開始年	2020年
これまでの経緯	カボチャ集団とハヤブサ集団の行動域が類似していることから2017年に同一群とされる。発信器装着個体ハヤブサはオス個体であった為、2020年メス個体に装着し直しアオダモ群と命名。 2023年に推定頭数を超える捕獲があったため、ほぼ消滅寸前である。
追跡調査の実施状況	継続追跡中
累積捕獲数(頭)	59
推定個体数	19頭以上
重点利用場所	行動域内の北側(神余畑)を集中的に利用
特記事項	不明群(カンナ)と行動域が重複している。カンナと一時的に接近または合流している可能性があり個体間距離近い。

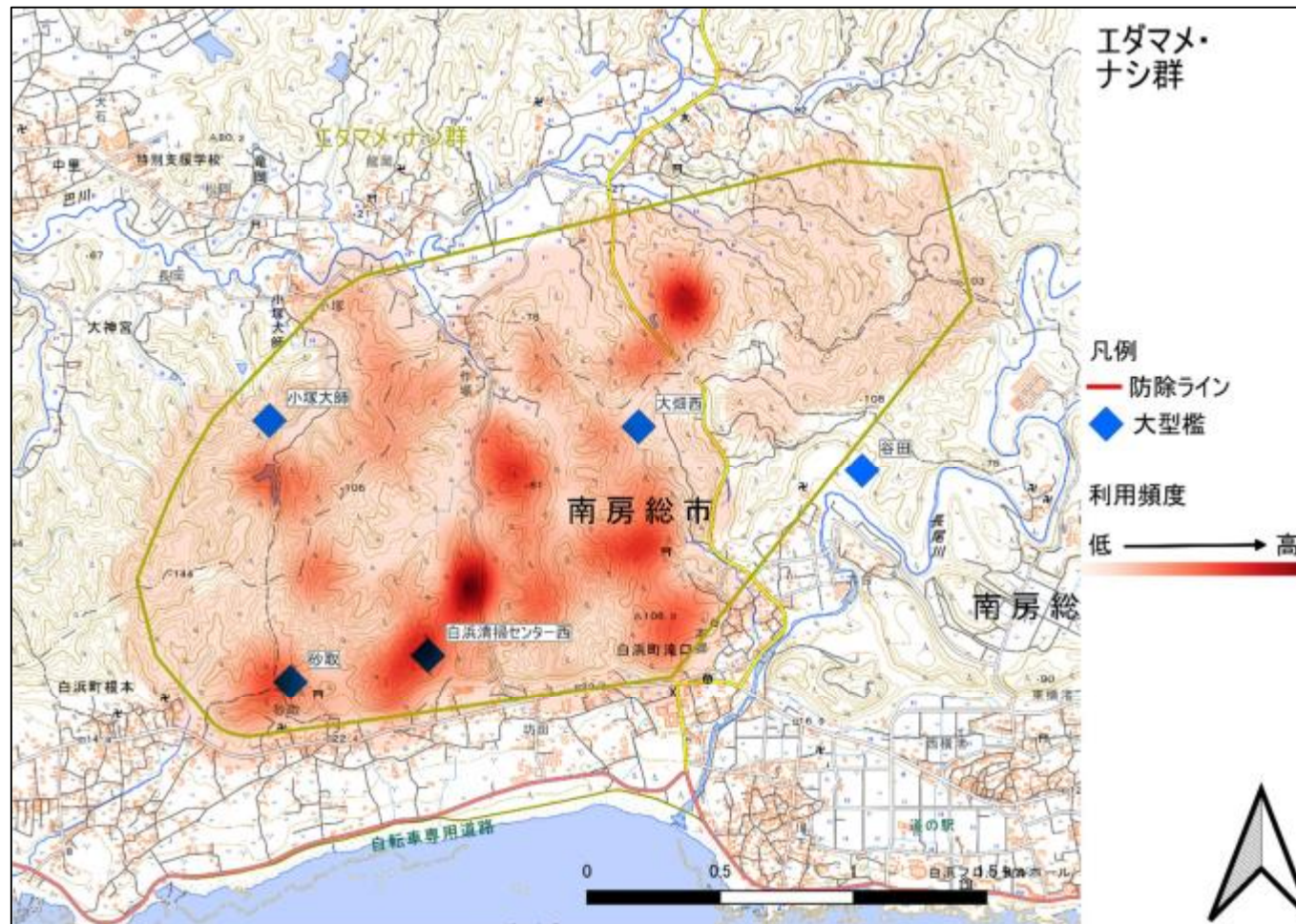


群れ名	カンナ含む群れ
群れの	2024年
行動追跡調査の開始年	2024年
これまでの経緯	2024年8月に発信器が装着され、所属群は不明である。
追跡調査の実施状況	今年度から追跡開始。2025年1月から不具合により測位停止
累積捕獲数(頭)	25
推定個体数	残存個体数を調査中
重点利用場所	行動域内の中心部(神余畑)を集中的に利用
特記事項	アオダモ群と行動域が重複している。サザンカと一時的に接近または合流している可能性があり個体間距離近い。

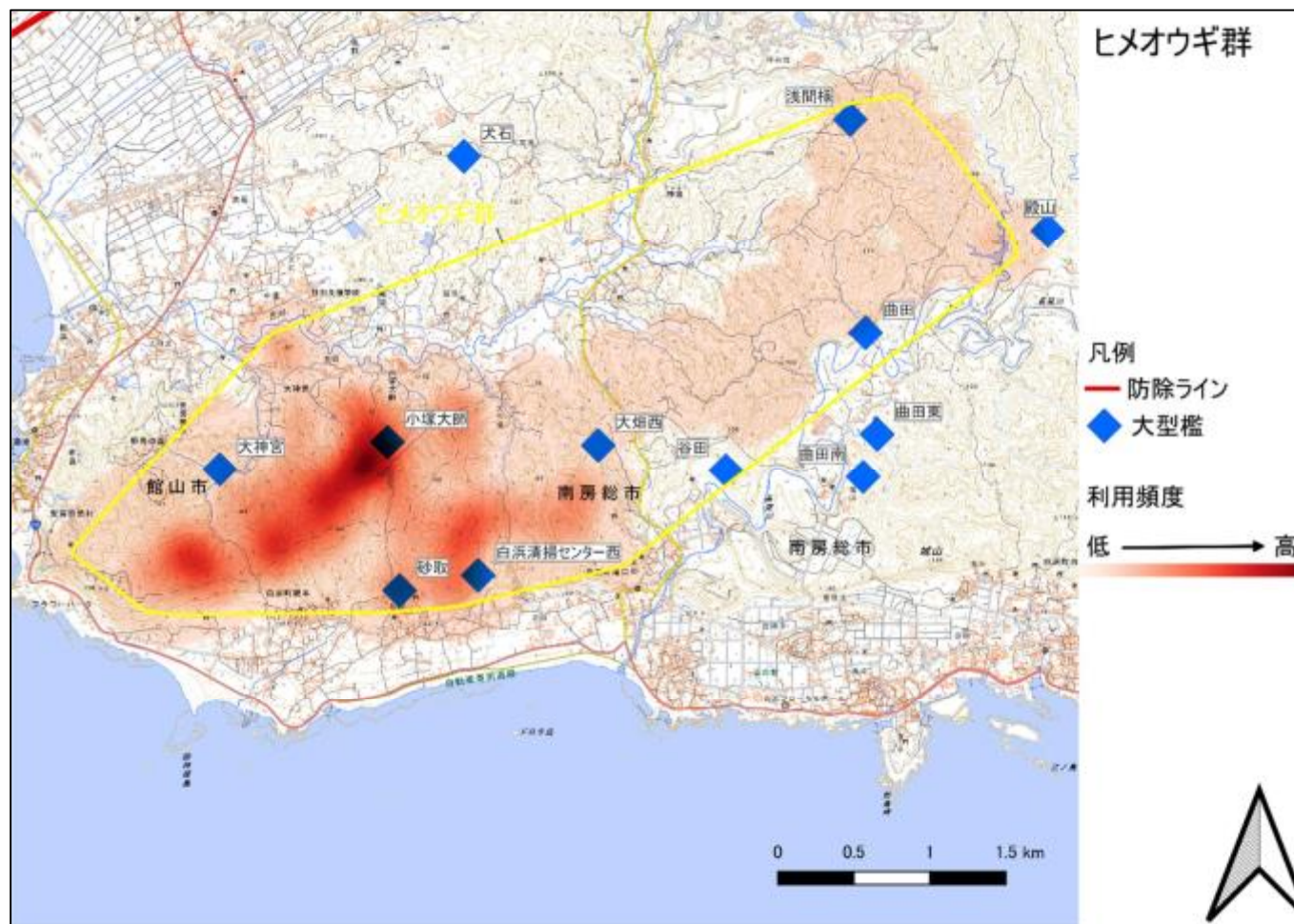
(2) 西側地域



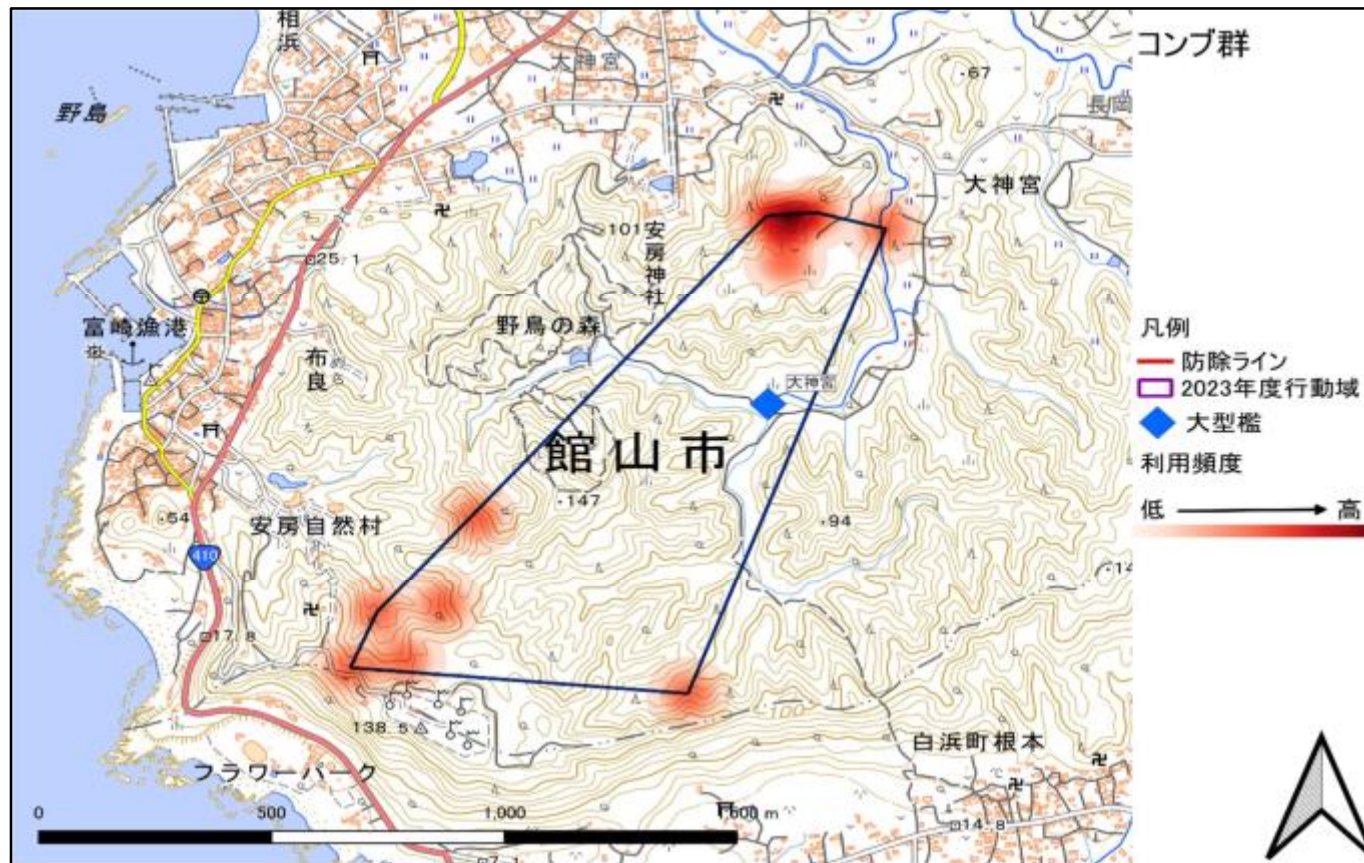
群れ名	ミヤコ・クワ群
群れの	2013年
行動追跡調査の開始年	2013年
これまでの経緯	2013年にクワ群とミヤコ群が合流したことによりミヤコ・クワ群となる。2022年にはヒメオウギとの一時的な合流がみられた。
追跡調査の実施状況	継続追跡中(測位停止)
累積捕獲数(頭)	43
推定個体数	10～20頭程度
重点利用場所	データ数が昨年と比べて大幅に減少したため、過小評価となるが、行動域の中心部(大神宮)を集中的に利用
特記事項	2023年度に続き、ナツミカンとツユクサが時々別行動している。



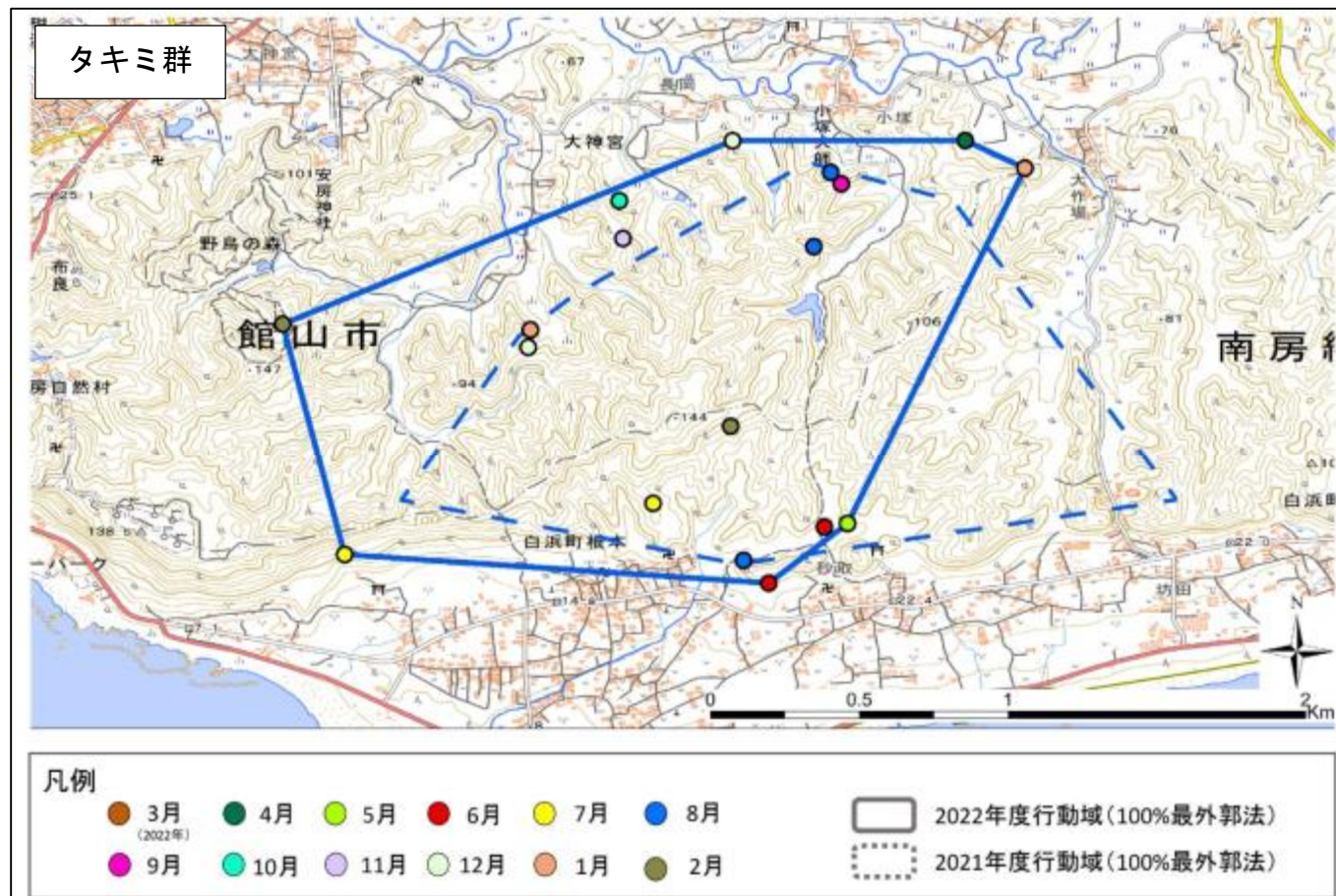
群れ名	エダマメ・ナシ群
群れの	2012年
行動追跡調査の開始年	2012年
これまでの経緯	2012年にオタキ群が分裂し、一方がエダマメ・ナシ群となる。
追跡調査の実施状況	継続追跡中
累積捕獲数(頭)	165
推定個体数	68頭
重点利用場所	行動域の南側(白河清掃センター)を集中的に利用
特記事項	昨年度、別行動していたアズキは発信器脱落のため今年度は追跡できていない



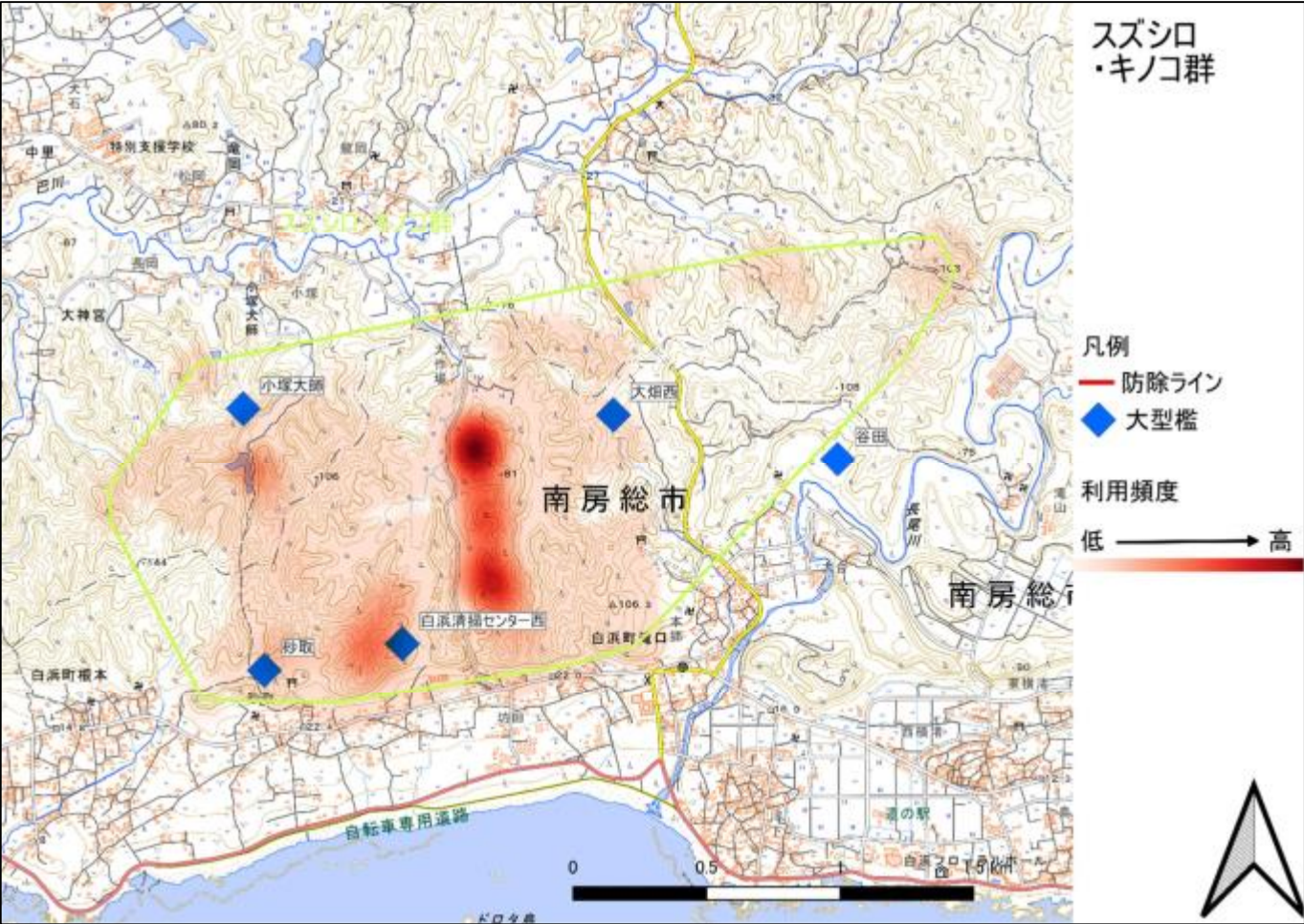
群れ名	ヒメオウギ群
群れの	2018年
行動追跡調査の開始年	2018年
これまでの経緯	2018年にエダマメ・ナシ群から分裂し、一方がヒメオウギ群となる。 2022年頃からミヤコ・クワ群と時々合流する様子が確認されている。 2023年に推定頭数を超える捕獲があったため、ほぼ消滅寸前である。
追跡調査の実施状況	継続追跡中
累積捕獲数(頭)	197
推定個体数	57～61頭以上
重点利用場所	行動域の南側(小塚大師)を集中的に利用
特記事項	2023年に発信器を装着したサンドはヒメオウギ群所属であることが確認された



群れ名	コンブ群
群れの	2015年
行動追跡調査の開始年	2015年
これまでの経緯	2015年にスズシロ・キノコ群が分裂し、一方がコンブ群となる。
追跡調査の実施状況	発信器の脱落により、2023年9月から追跡不可
累積捕獲数(頭)	5
推定個体数	10～30頭程度
重点利用場所	—
特記事項	不明群(ネメシア)と同一群の可能性が高い

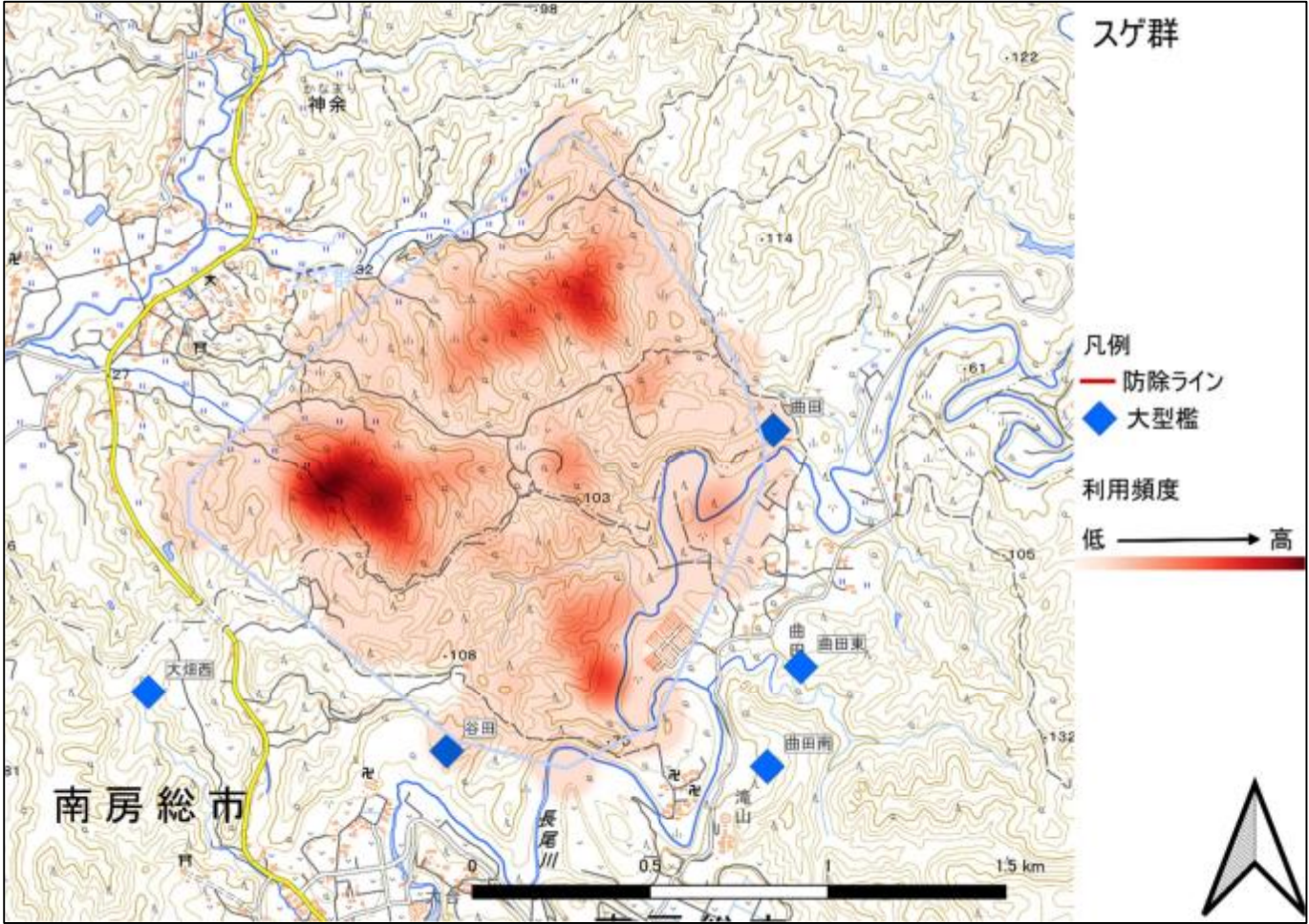


群れ名	タキミ群
群れの 行動追跡調査の開始年	2007年
これまでの 経緯	2007年にオタキ群が分裂し、一方がタキミ群となる。
追跡調査の 実施状況	一時期追跡不可だったが今年度に再度発信器が装着され追跡再開
累積捕獲数 (頭)	53
推定個体数	56頭程度
重点利用場 所	2025年2月に装着のため、追跡できていない
特記事項	

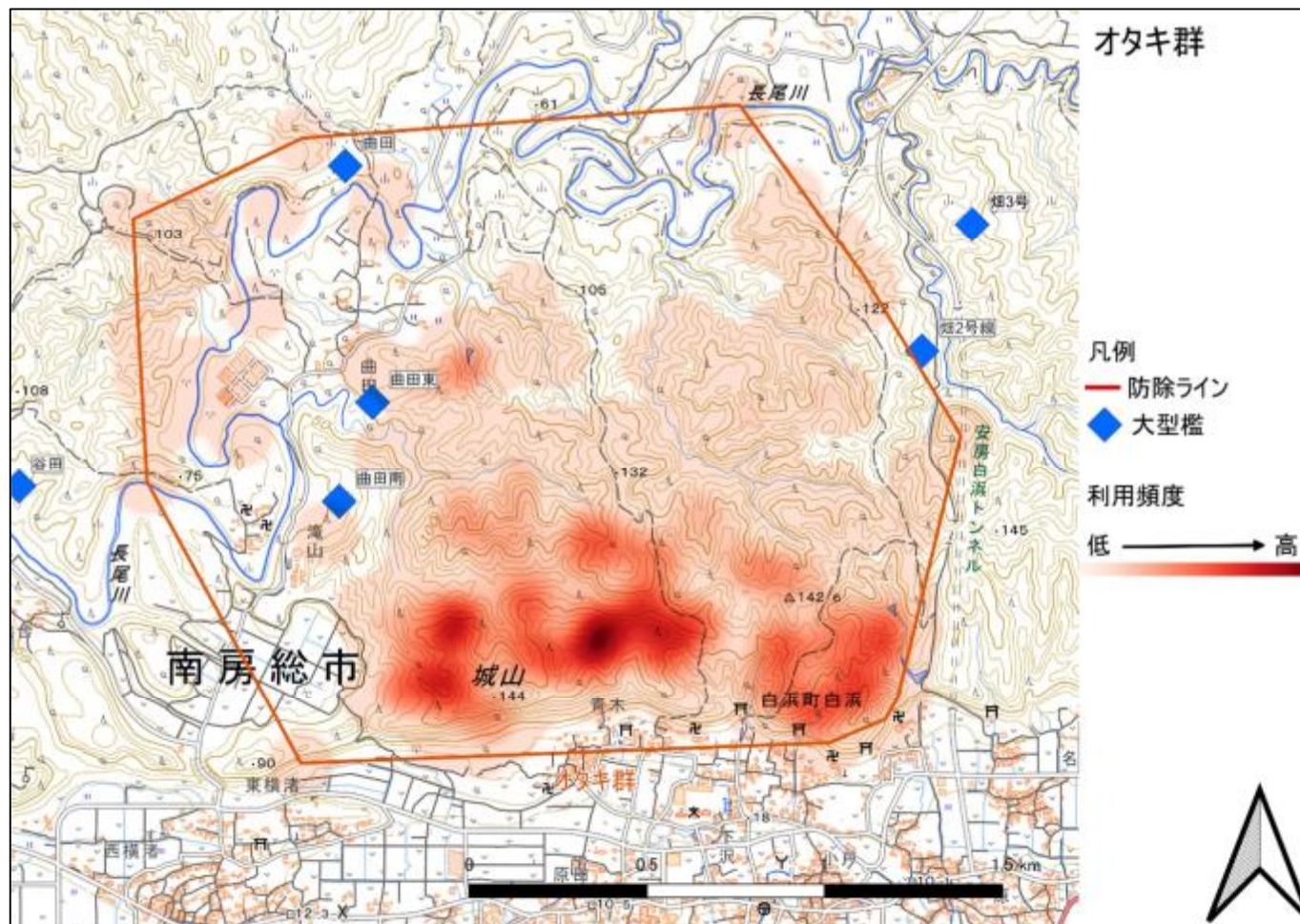


群れ名	スズシロ・キノコ群
群れの	2015年
行動追跡調査の開始年	2015年
これまでの経緯	2007年にオタキ群が分裂してきたスズシロ集団と、2013年にオタキ集団から分裂したキノコ集団が2015年に合流しスズシロ・キノコ群となる。 2023年に推定頭数を超える捕獲があったため、ほぼ消滅寸前である。
追跡調査の実施状況	継続追跡中
累積捕獲数(頭)	79
推定個体数	26頭以上
重点利用場所	南房総市大作場を南北はしる道路東側を集中的に利用
特記事項	

(3) 中央地域



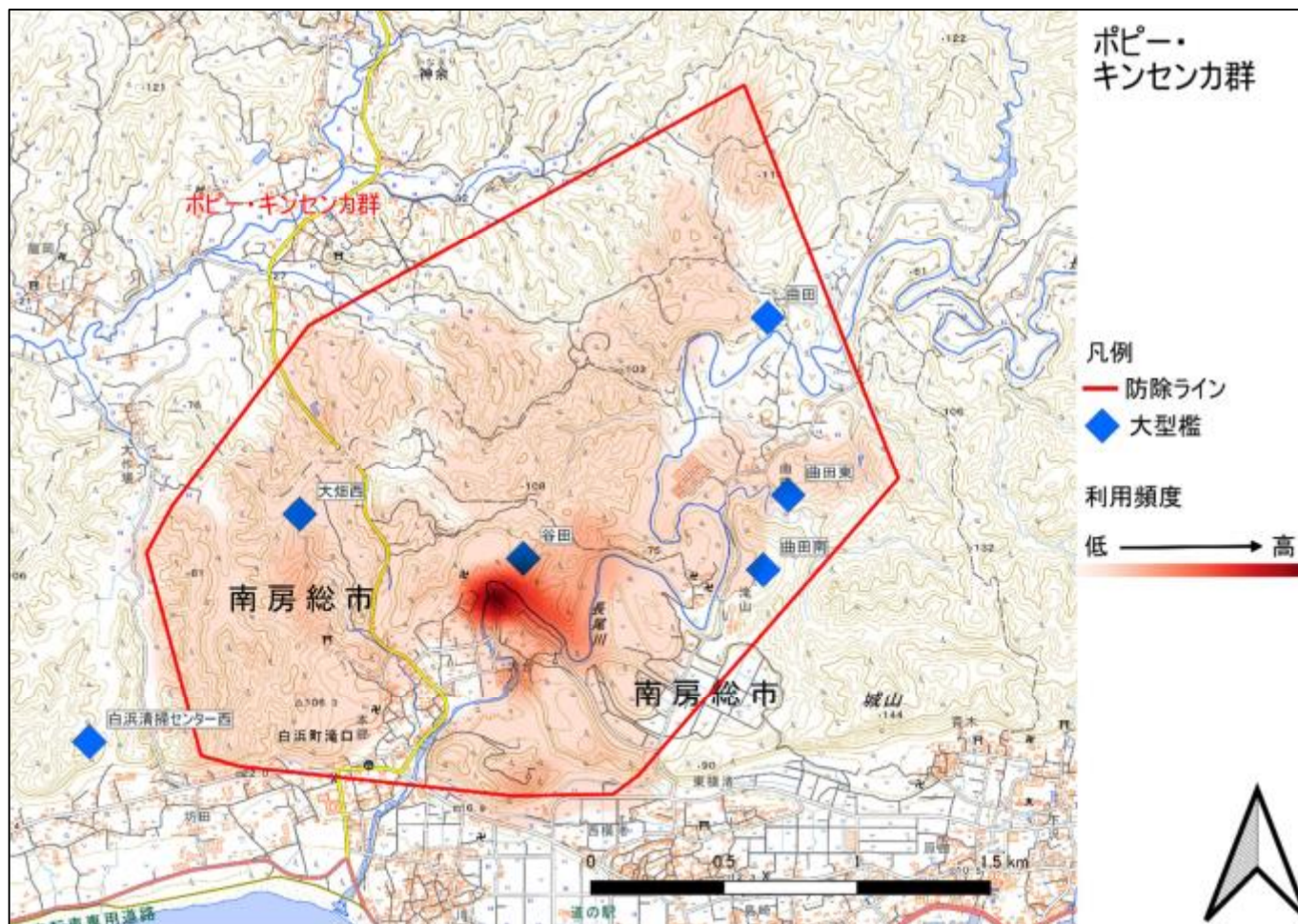
群れ名	スゲ群
群れの 群れの	2020年
行動追跡調査の開始年	2020年
これまでの 経緯	2020年にオタキ・ススキ群が分裂し、一方がスゲ群となる。オタキ群のレンゲが2022年11月以降オタキ群とは離れ、スゲ群と合流した。
追跡調査の 実施状況	継続追跡中(測位停止)
累積捕獲数 (頭)	9
推定個体数	10～20頭程度
重点利用場 所	行動域の中心部(曲田西側)を集中的に利用
特記事項	



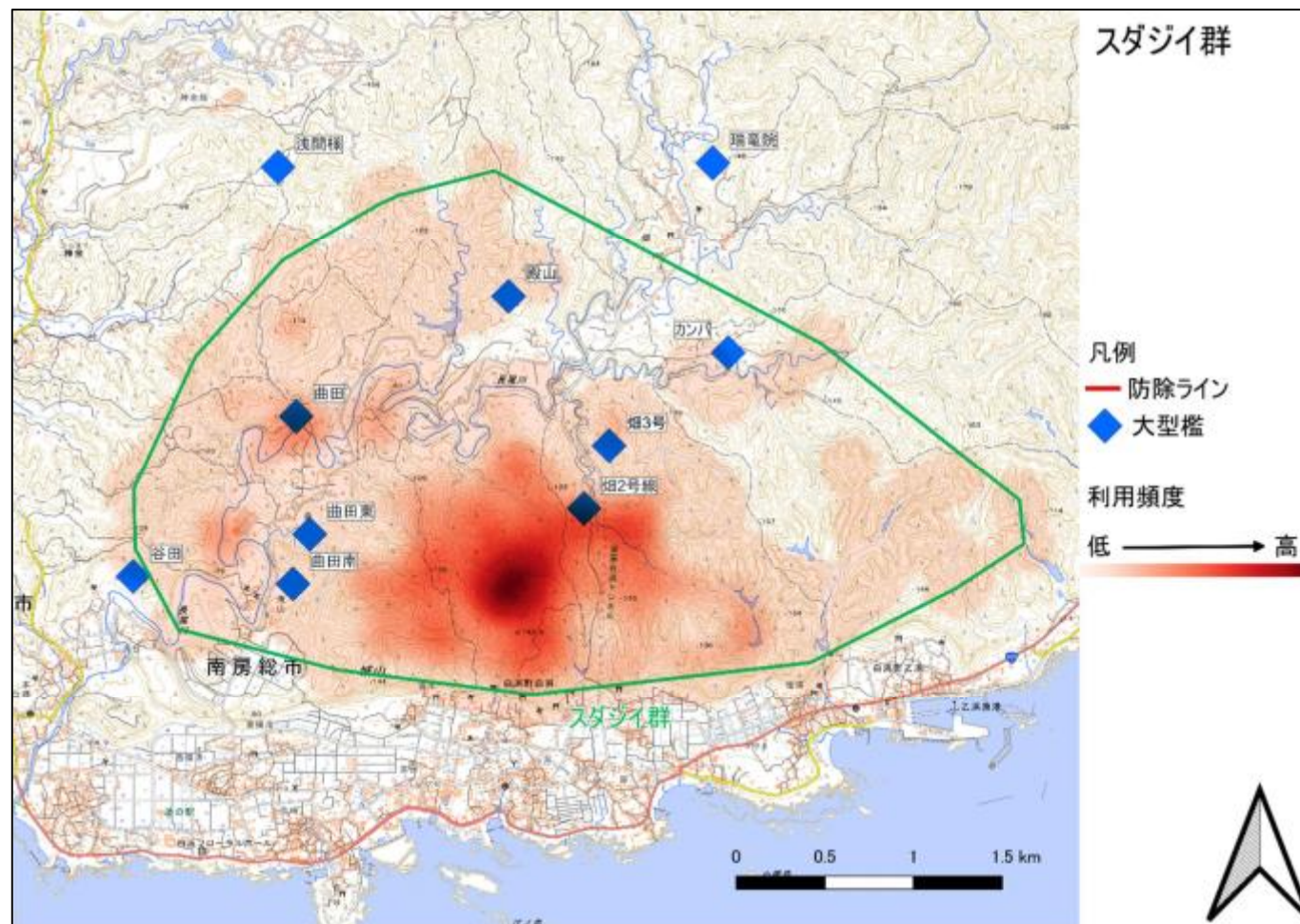
群れ名	オタキ群
群れの	2020年
行動追跡調査の開始年	2020年
これまでの経緯	2020年にオタキ・ススキ群が分裂し、一方がオタキ群となる。アリドオン群と行動域が類似している。
追跡調査の実施状況	継続追跡中(測位停止)
累積捕獲数(頭)	772
推定個体数	10～30頭程度
重点利用場所	長尾川と安房グリーンラインに挟まれた山間部を集中的に利用
特記事項	スダジイ群と一時的に接近または合流している可能性があり個体間距離近い。

アリドオシ群：データなし

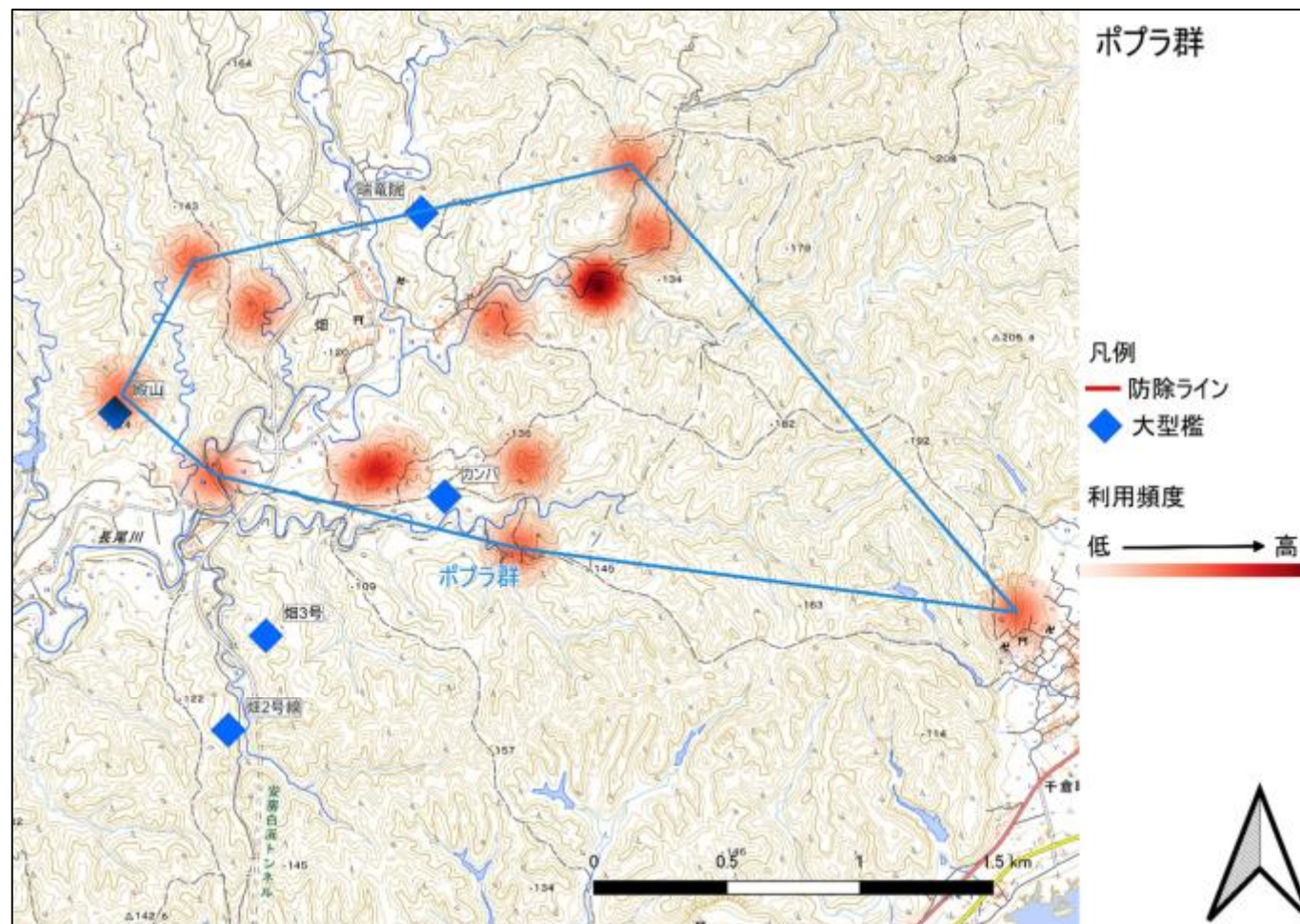
群れ名	アリドオシ群
群れの	2015年
行動追跡調査の開始年	2015年
これまでの経緯	2014年に発信器が装着された群れで、オタキ・ススキ群から分裂してできた群れかヨモギ群に移籍したあとに分裂してできた群れの可能性がある。
追跡調査の実施状況	2019年以降追跡できていない
累積捕獲数(頭)	127
推定個体数	不明
重点利用場所	—
特記事項	今年度、追跡はできていない



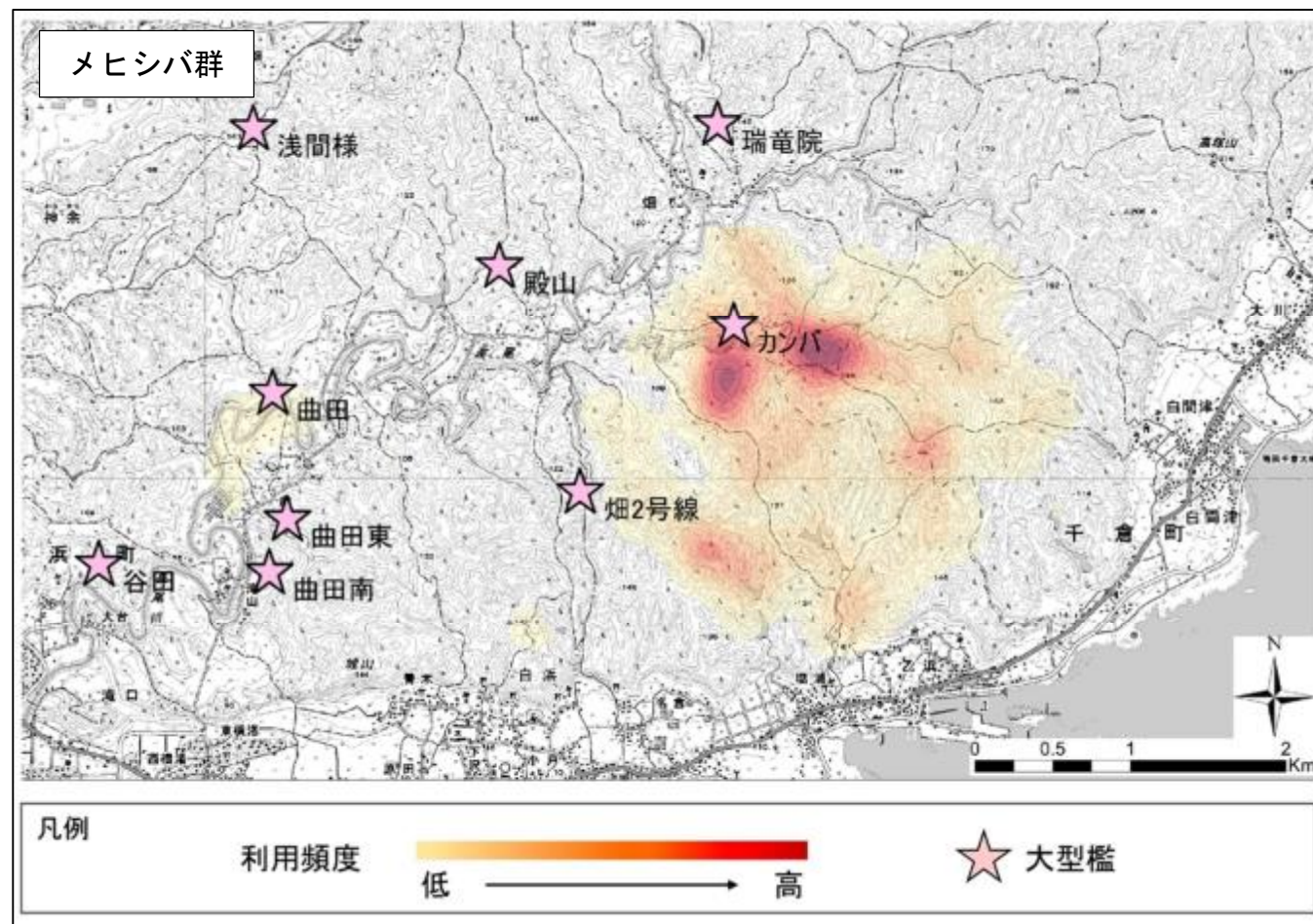
群れ名	ポピー・キンセンカ群
群れの	2014年
行動追跡調査の開始年	2014年
これまでの経緯	2014年2月に発信器を装着した。2015年度は追跡調査期間が短いことからポピー・キンセンカ集団（仮）としたが、その後の調査で他の群れと合流することがなかったことからポピー・キンセンカ群と命名。 行動域からヨモギ群あるいはオタキ群由来の群れからの分裂群である可能性が考えられる。
追跡調査の実施状況	一時期追跡不可だったが2022年に再度発信器が装着され追跡再開
累積捕獲数（頭）	62
推定個体数	50頭程度
重点利用場所	長尾川南側(大台)を集中的に利用
特記事項	



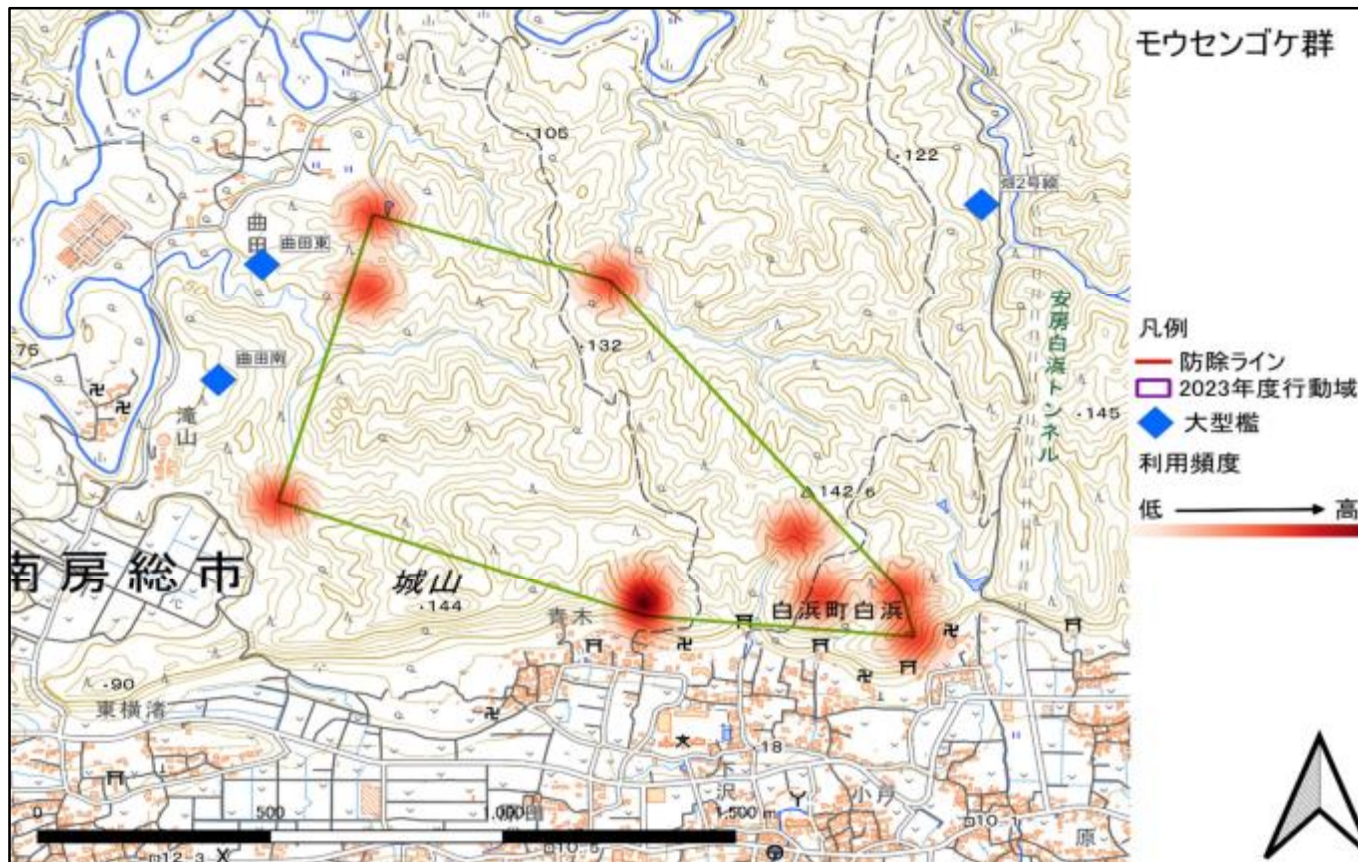
群れ名	スダジイ群
群れの 群れの	2016年
行動追跡調査の開始年	2016年
これまでの経緯	2019年のカウント調査で300頭規模と確認された大規模群で、分合流の動きが頻繁に見られる。2022年に発信器装着個体のメヒシバとボブラが頻繁に別行動していたことから別群と判断される。
追跡調査の実施状況	継続追跡中
累積捕獲数(頭)	152
推定個体数	278頭以上
重点利用場所	安房白浜トンネル西側の山間部を集中的に利用
特記事項	オタキ群と一時的に接近または合流している可能性があり個体間距離近い。



群れ名	ポプラ群
群れの 群れの	2022年
行動追跡調査の開始年	2022年
これまでの経緯	2021年にスタジイ群と別行動していることが確認され始め、2022年に分裂していると判断し、ポプラ群と命名。
追跡調査の実施状況	発信器の電池切れにより、2023年8月頃から追跡不可
累積捕獲数(頭)	0
推定個体数	不明
重点利用場所	データ数が昨年と比べて大幅に減少したため、過小評価となるが、行動域の中央部(煙の東側)を集中的に利用
特記事項	



群れ名	メヒシバ群
群れの	
行動追跡調査の開始年	2022年
これまでの経緯	2021年にスタジイ群と別行動していることが確認され始め、2022年に分裂していると判断し、メヒシバ群となる。
追跡調査の実施状況	2022年10月に何等かの不具合により発信器の追跡不可
累積捕獲数(頭)	分裂してから捕獲無し
推定個体数	不明
重点利用場所	—
特記事項	今年度、追跡はできていない

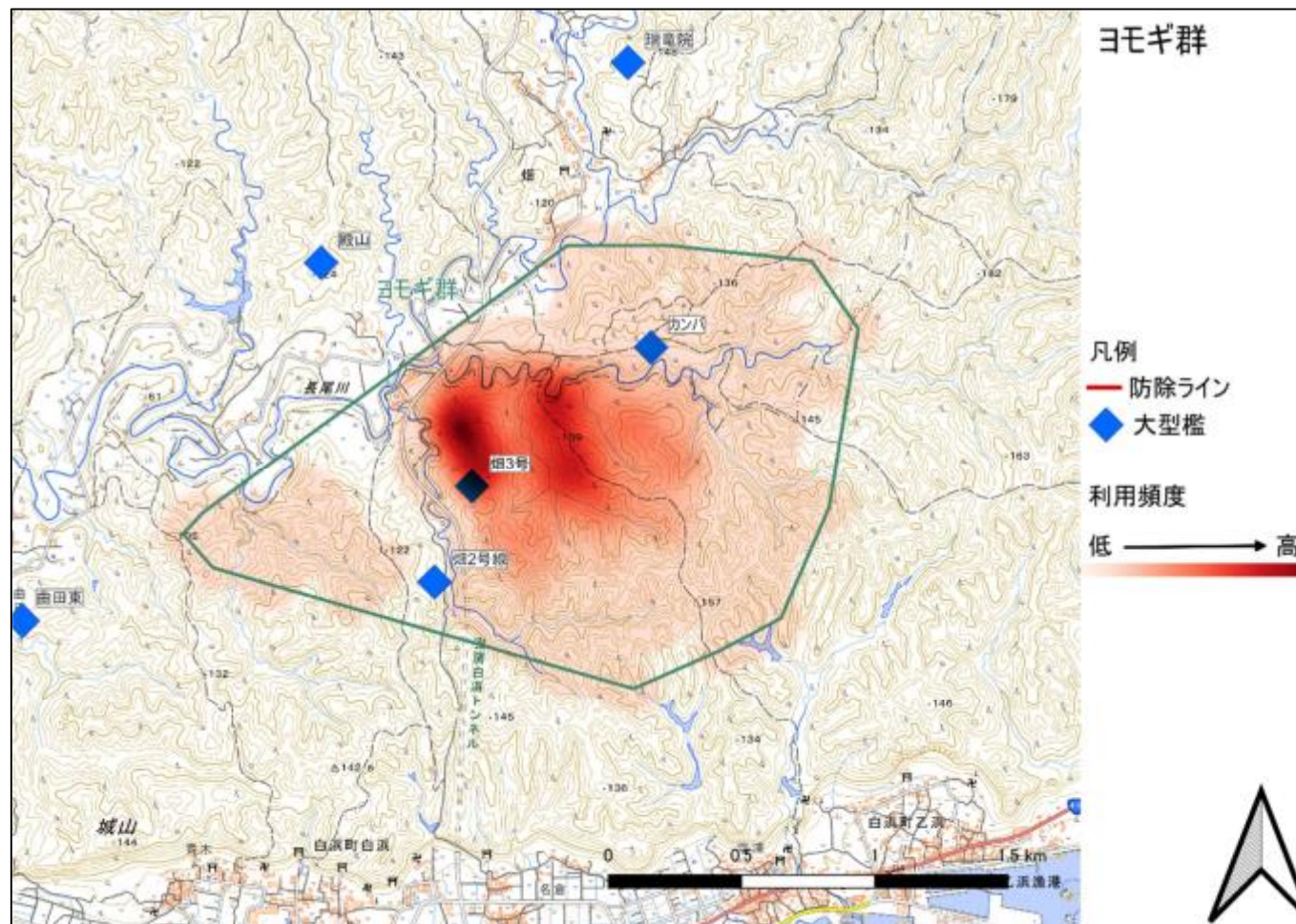


群れの 確認年	2016年
行動追跡調 査の開始年	2017年
これまでの 経緯	2017年に発信器を装着しモウセンゴケ・ゼニゴケ集団（仮）とした。その後の調査でアリオドン群やスダジイ群と行動域が重複するものの、行動を共にする様子は認められなかったことから2017年にモウセンゴケ群と命名。近年はオタキ群やスダジイ群と類似する行動域を持ち、2023年1月頃オタキ群のエンジュとゴミと合流した可能性があった。
追跡調査の 実施状況	発信器の電池切れにより、2023年12月以降追跡不可
累積捕獲数 （頭）	10
推定個体数	不明
重点利用場 所	－
特記事項	今年度、追跡はできていない

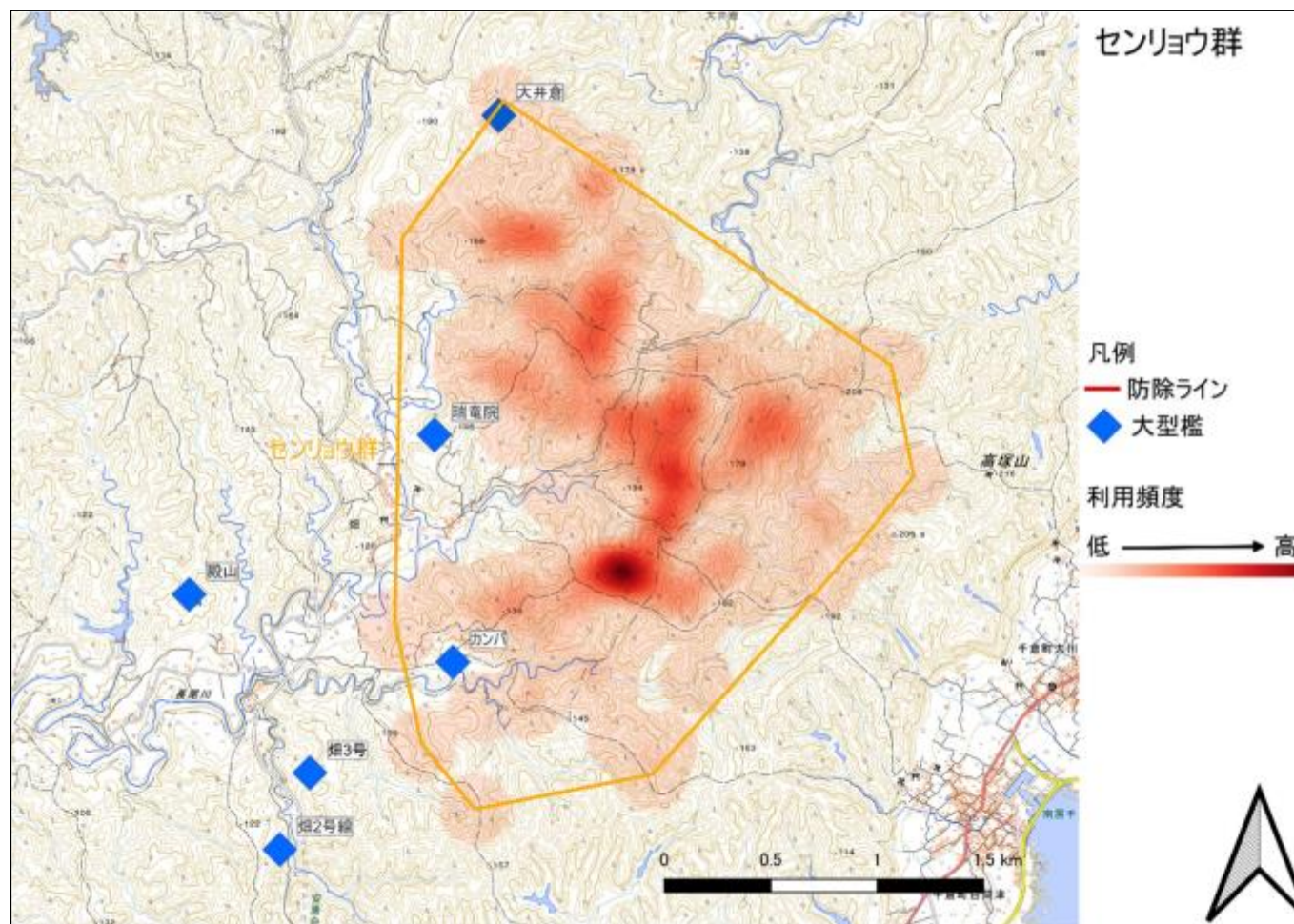
41



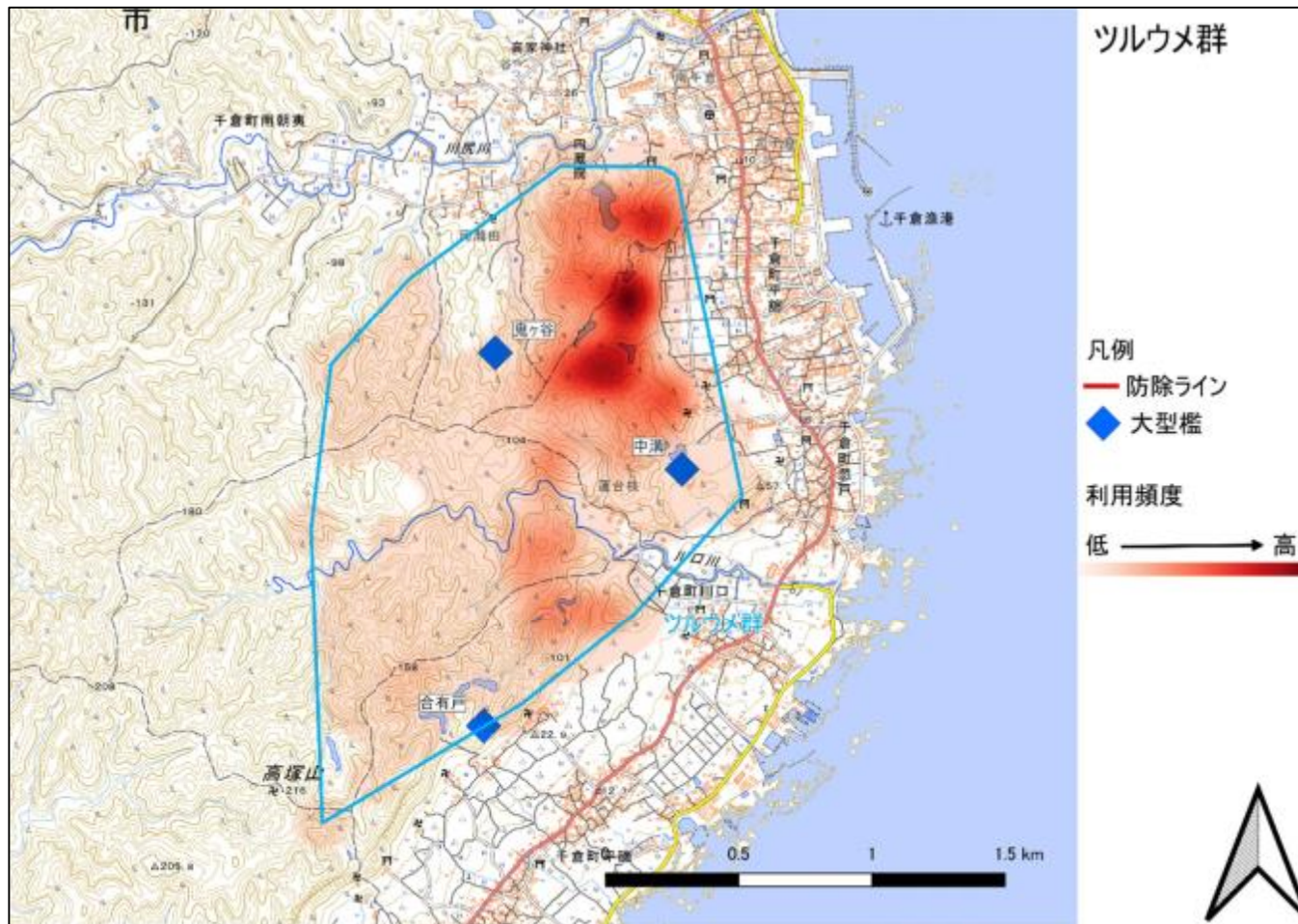
群れ名	アジサイ群
群れの	2011年
行動追跡調査の開始年	2011年
これまでの経緯	2011年にオタキ群が分裂し、一方がアジサイ群となる。 2022年、発信器装着個体のアジサイとテイカが頻繁に別行動する様子が確認されている。
追跡調査の実施状況	継続追跡中(測位停止)
累積捕獲数(頭)	59
推定個体数	50～60頭程度
重点利用場所	データ数が昨年と比べて大幅に減少したため、過小評価となるが、行動域の南側(畑北側の安房グリーンライン沿い)を集中的に利用
特記事項	昨年度からテイカとアジサイの別行動が頻繁に確認されていたが、モミノキとも一時的に合流していた。



群れ名	ヨモギ群
群れの	2008年
行動追跡調査の開始年	2008年
これまでの経緯	2008年にミヤコ群所属の発信器装着個体を移動放獣した結果、フジオ集団（仮称）に加入。その後、ヨモギ集団と命名されたが、その後の調査で周囲の発信器装着集団と一度も合流が確認されなかったことからヨモギ群となる。2019年にスタジイ群の発信器個体マサキの移籍が確認される。
追跡調査の実施状況	2015年以降しばらく追跡できていなかったが、2018年に再度発信器が装着され追跡再開
累積捕獲数（頭）	32
推定個体数	11頭以上
重点利用場所	行動域の中心部(煙南側)を集中的に利用
特記事項	集中利用域に大型檻を設置した



群れ名	センリョウ群
群れの	2012年
行動追跡調査の開始年	2012年
これまでの経緯	2012年に発信器が装着され、当初はセンリョウ集団としていたが、2017年センリョウ群となった。 行動域内で季節毎に利用場所を使い分ける行動が確認されている。
追跡調査の実施状況	継続追跡中(測位停止)
累積捕獲数(頭)	201
推定個体数	20～30頭程度
重点利用場所	行動域の中心部(畑東側)を集中的に利用
特記事項	捕獲が難しい、山間部をの利用が非常に多い

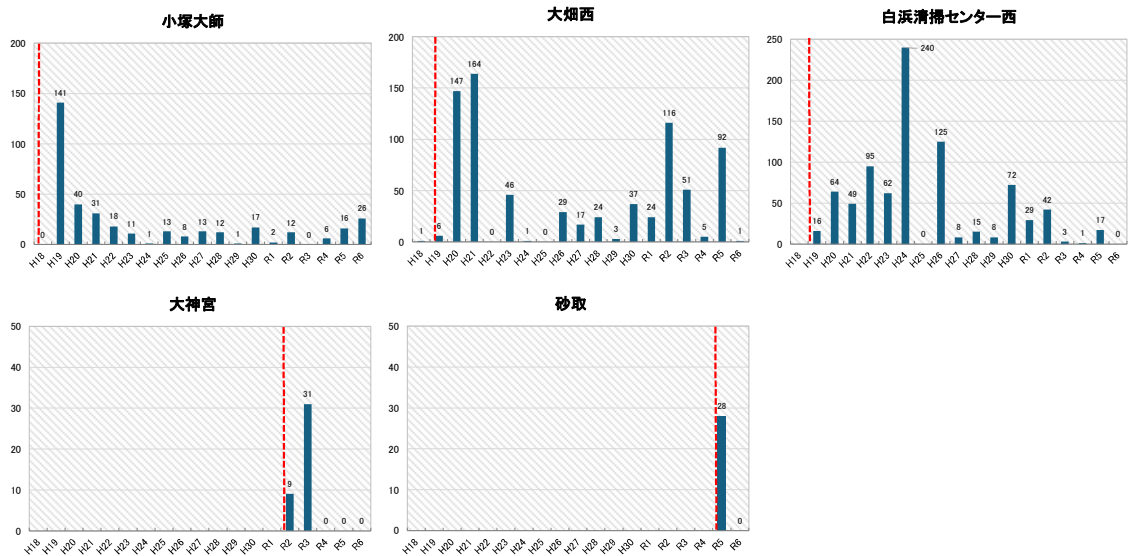


群れ名	ツルウメ群
群れの	2021年
行動追跡調査の開始年	2021年
これまでの経緯	2008年にミヤコ群所属の発信器装着個体を移動放獣したが、大きな群れへの加入はないと推察され、その後も情報が少なく、動向を追跡できていなかった。その後、2022年1月に発信器装着個体が再捕獲され、不明群に加入していることが確認されたことからツルウメ群となる。旧バンジー/ピオラ群と重複する行動圏が確認されている
追跡調査の実施状況	一時期追跡不可であったが、2022年に再度発信器が装着され追跡再開
累積捕獲数(頭)	3
推定個体数	50頭以上
重点利用場所	行動域の東側(岡瀬田、蓮台枝の山間部)を集中的に利用
特記事項	

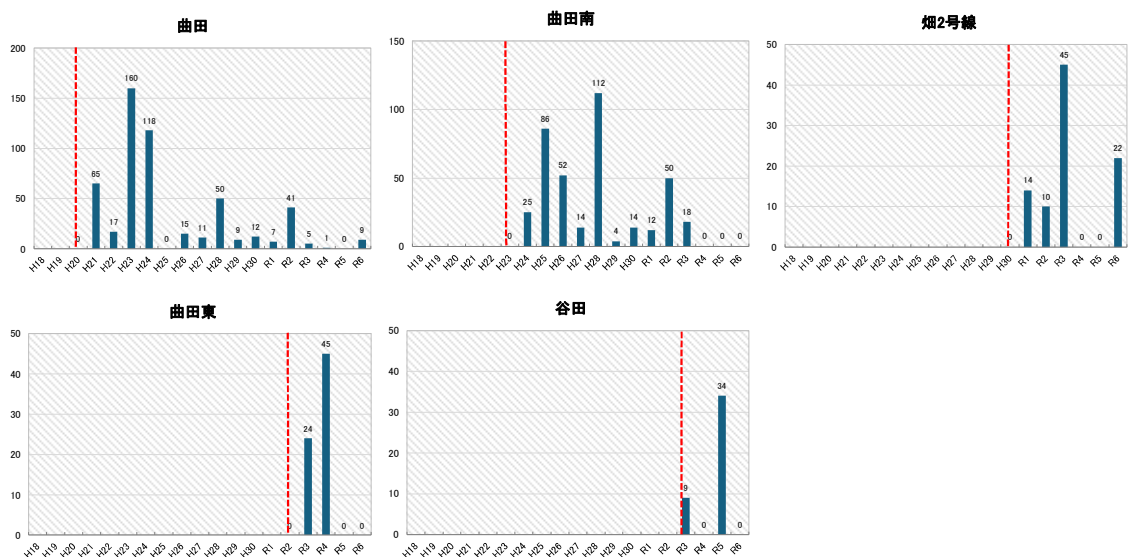
参考資料

地域区分別の大型檻の建設年と捕獲数の推移を示したグラフ

<西部>

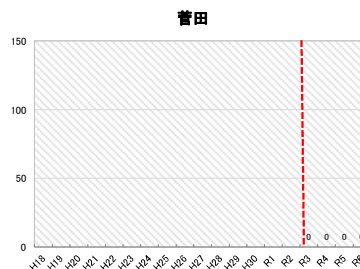
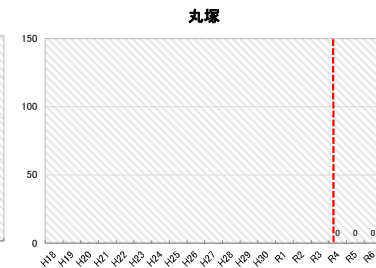
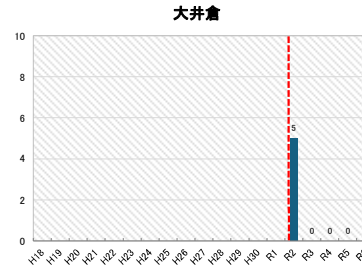
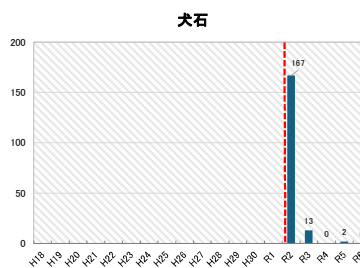
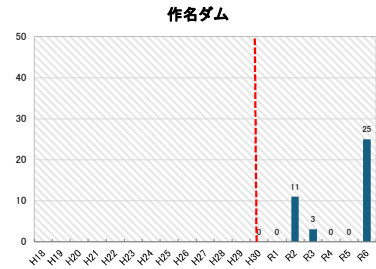
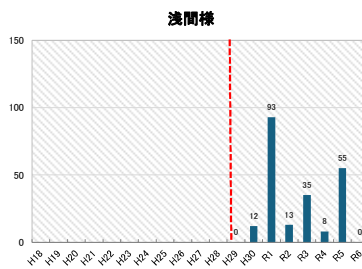
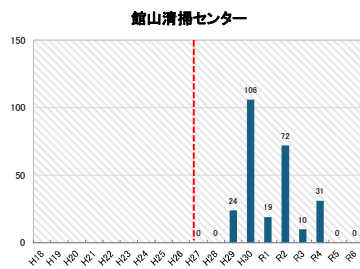


<中央部>

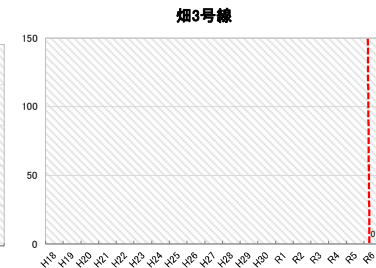
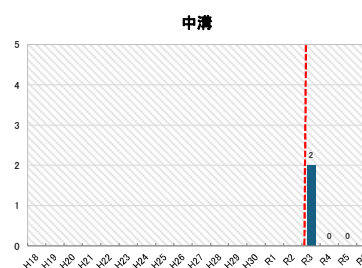
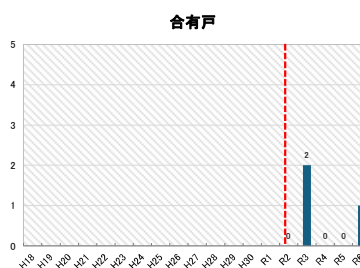
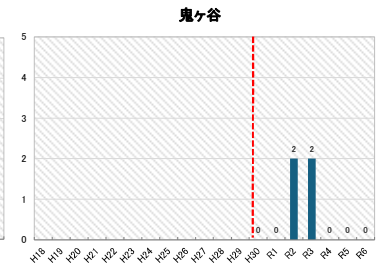
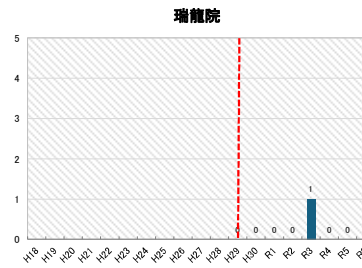
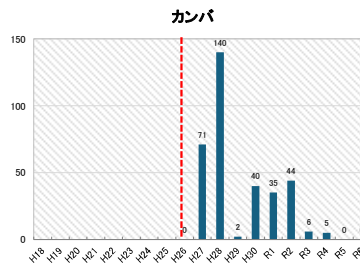


※赤破線は檻の設置開始年度、縦軸は捕獲頭数、横軸は年度を示す。

<北部>



<東部>



※赤破線は檻の設置開始年度、縦軸は捕獲頭数、横軸は年度を示す。